

港区立新郷土資料館展示等総合計画

平成25年8月

港区教育委員会

目 次

I 展示等総合計画の策定にあたって

1 展示等総合計画の背景	1
(1) 自然・歴史文化資源の宝庫	1
(2) 港郷土資料館の現況	2
(3) 生涯学習への関心のたかまり	2
(4) 地域の自然、歴史、文化の再発見	3
(5) 新郷土資料館の開設	4
2 展示等総合計画策定の経緯	5
(1) 「開設準備委員会」設置までの経緯	5
3 開設地 — 旧国立保健医療科学院	7
(1) 建物の概要	7
(2) 建物の沿革	7

II 基本的な考え方

1 設置の目的	9
2 対象	9
3 理念	10
(1) 港区の自然・歴史文化資源の蓄積と継承 (Collection)	10
(2) 港区の自然・歴史文化資源に関わる情報の発信と交流 (Communication)	10
(3) 港区の自然・歴史文化資源の再発見と評価を通じた新たな価値の創造 (Creation)	10
4 機能	11
(1) 収集・保存機能	11
(2) 調査・研究機能	11
(3) 公開・普及機能	11
(4) 情報交換・交流機能	12
5 整備の方針	12
(1) 貴重な建物や資料を適切に保存・保全し、 その価値を後世に伝えるための環境を整備する	12
(2) 利用者と区内外・国内外の人々や施設などをつなぐ活動を展開する	12
(3) 利用者や他施設・機関などとの協働によって活動するしくみを整備する	12
(4) 利用者が繰り返し訪れたいくなる事業展開を行う	12

III 展示計画

1 基本的な考え方	13
(1) 誰もが興味や知識に応じて港区の自然、歴史、文化に親しみ、 世界へと視野を広げられる展示	13
(2) いつ来ても新しい発見のある、柔軟で更新性の高い展示	13
(3) 地域づくりの寄与へつながるメッセージ性のある展示	13
(4) 資料を五感で楽しみ、長く記憶に留まる体験・体感型の展示	13
(5) 利用者が自然、歴史、文化をともに語り、綴ることができる参加・協働型の展示	13

2	展示の種類	14
	(1) 常設展示	14
	①ガイダンス展示	14
	②テーマ展示	14
	③コミュニケーションルーム	15
	④バックヤード展示	15
	(2) 企画展示	15
	①企画展示	15
	②区民ギャラリー	15
	(3) ネットワーク展示	15
3	展示の構成案	16
	(1) 常設展示	16
	①ガイダンス展示	16
	②テーマ展示	17
	③コミュニケーションルーム	22
	④バックヤード展示	22
	(2) 企画展示	22
	①企画展示	22
	②区民ギャラリー	23
	(3) ネットワーク展示	23

IV 事業計画

1	基本的な考え方	24
2	事業の概要	24
3	事業の展開	25
	(1) 収集・保存事業	25
	(2) 調査・研究事業	26
	(3) 公開・普及事業	27
	(4) 情報交換・交流事業	30
	(5) 広報・情報発信事業	32
	(6) ショップ・カフェ事業	33

V 施設計画

1	基本的な考え方	34
2	諸室の構成	34

参考資料

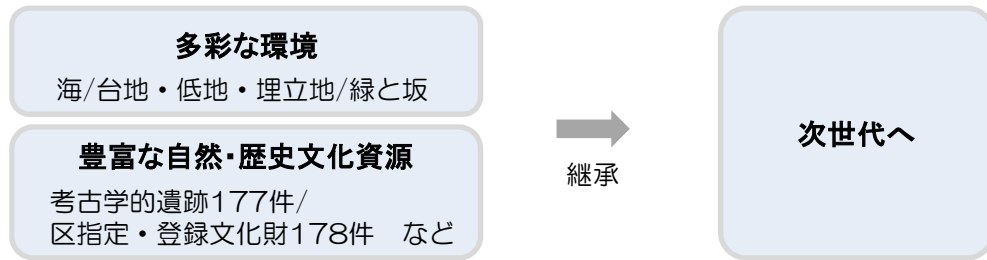
1	港区立新郷土資料館開設準備委員会設置要綱	37
2	新郷土資料館開設準備委員会委員名簿	38
3	新郷土資料館開設準備委員会開催経過	39
4	「港区立新郷土資料館展示等総合計画（素案）」に関する区民意見について	40

1 展示等総合計画の策定にあたって

1 展示等総合計画の背景

(1) 自然・歴史文化資源の宝庫

次世代へ継承すべき、多彩な自然・歴史文化資源



港区は、北西一帯の台地と、海に面する南東の低地・埋立地からなり、東京23区のなかでもひととき豊かな緑に恵まれ、数多くの坂を見ることができる起伏に富んだ地形環境を有しています。まちは多様性に富み、その歴史は遠く旧石器時代にまでさかのぼります。市街化が著しく進んだ今日でも、先史から近代までの遺跡が見られます。徳川家康入府後は、東海道筋をはじめとするさまざまところで町屋が発展し、多くの寺社や武家屋敷が軒を並べ、特色あるまち並みが発達しました。幕末から近代初頭にかけては諸外国の公使館が置かれ、ヒュースケン暗殺事件など歴史に名を留める事件の舞台ともなりました。近代以降は海外の新たな文化を真っ先に受け入れる場であり続けてきました。

港区では現在、177件⁽¹⁾の考古学的遺跡が確認されており、また、有形・無形文化財、史跡、旧跡、名勝、天然記念物など178件⁽¹⁾の区指定・登録文化財をはじめ、数多くの貴重な自然・歴史文化資源を見ることができます。これらの自然・歴史文化資源を守り、次世代に向け、継承していくことは、現代に生きる私たちにとっての責務といえます。

註(1) 平成25年4月1日現在

(2) 港郷土資料館の現況

豊かな所蔵資料を活かしきれない、狭あいな建物と不十分な設備



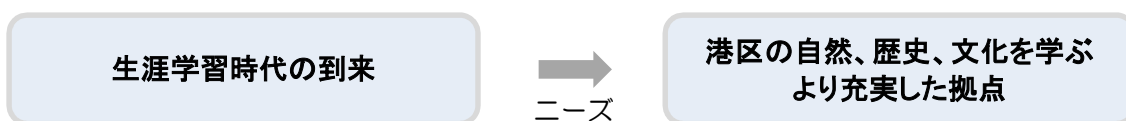
昭和57（1982）年4月、港区は伊皿子貝塚遺跡の発掘調査の成果を、区民をはじめとする多くの方々に知っていただくことを主な目的として「港区立港郷土資料館」を開設しました。その後、同館では港区の歴史や文化に関する資料の調査・研究を積極的に進め、その成果を、展示あるいは印刷物などのさまざまな普及事業を通じて公開するとともに、資料の収集・保存にも力を注いできました。区内外からの貴重な寄贈・寄託資料、購入資料、発掘資料などが着実に蓄積され、現在、62,000件⁽¹⁾を超える資料を所蔵しています。

しかしながら港郷土資料館は、833㎡という狭あいな延床面積に加え、博物館施設としては設備が不十分であり、資料の適正管理や展示公開において多くの困難が生じています。たとえば設備の点では、展示室・収蔵庫ともに安定した温湿度の維持が困難なため、資料を適切に収蔵・管理する上で支障が生じています。スペースについて見ると、館内の収蔵スペースが手狭なために館外の代替施設に資料を分散して収蔵せざるをえません。また調査・研究のための専用スペースがほとんど確保されていません。さらに展示室が常設展示室1室のみであることから、少し規模の大きな特別展示を行う場合は常設展示を全て撤収しなければならないなど、せっかくの区民への公開の機会を十分に活かすことができません。加えて、駅から数分という立地条件に恵まれながら、図書館との出入口が同一であることや4階にあることなどの理由から資料館の存在自体が認知されにくく、広くアピールする力は不十分です。

註(1) 平成25年4月1日現在

(3) 生涯学習への関心のたかまり

生涯学習時代のなかで、港区の自然、歴史、文化を学びたい人が増加



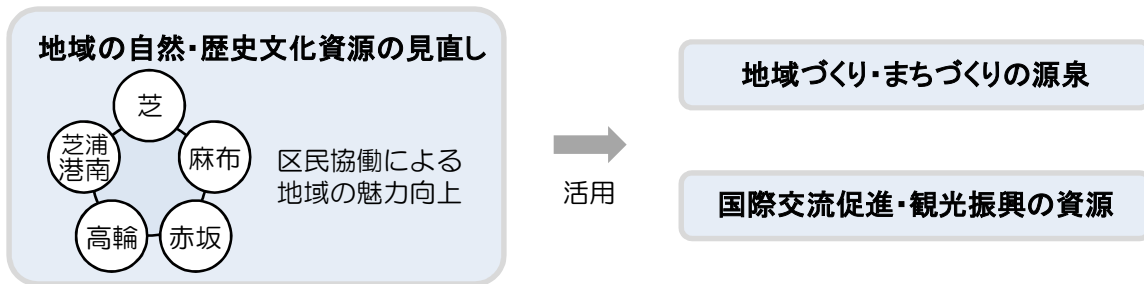
港郷土資料館では、開館から30年目に当たる今日まで、限られた環境と条件のもと、さまざまな創意工夫をしながら活動を続けてきました。現在も、港区の歴史や文化に関わるテーマで行う展示室全体を用いた特別展や企画展、資料館が所蔵している資料の公開や調査・研究成果を速報的な観点から実施するコーナー展⁽¹⁾、利用者が展示資料に直に触れ、学芸員との交流を図ることのできる「さわれる展示室」などの展示活動、あるいは研究紀要などの出版活動を通じて、公開・普及活動を続けています。また、平成14（2002）年度に、それまでの固定的な展示台を撤去、可動型の展示ケースを導入するなど、展示室のレイアウトや展示構成に変化をもたらす工夫をしてきました。

現在、本格的な生涯学習時代のなかで、港区の自然、歴史、文化を知りたい、学びたいという、区民、通学者・通勤者などの期待や要望はたしかに増えています。港郷土資料館の現状では、資料館が保有しているさまざまな資源を活用し、その機能を十分発揮することはきわめて困難で、こうした期待や要望に十分にこたえることはできません。

註(1) コーナー展とは常設展示室の一区画を利用して展開する小規模な展示をいう

(4) 地域の自然、歴史、文化の再発見

地域づくり・まちづくりの源泉、国際交流促進・観光振興の資源としてアピール



港区では、平成18（2006）年4月、区役所・支所改革を実施し、芝地区、麻布地区、赤坂地区、高輪地区、芝浦港南地区の5地区からなる地区総合支所制度による区政運営を開始しました。この地区総合支所制度によって各総合支所では、区民協働により地域の魅力をたかめるため、地域の歴史資源の発掘や魅力アップにつながる「語り部」の養成講座の開催や、昔の写真などのデジタルデータ化を進めるといった取り組みを行っています。その結果、地域の自然・歴史文化資源に対する区民の関心が一層たかまっており、地域の自然・歴史文化資源を活かした地域づくり・まちづくりはますます広がっていくと思われれます。

さらに、港区の人口は平成22（2010）年10月現在、約20万5千人ですが、同年同月に実施された国勢調査では、港区の昼間人口は約89万人です。港区は、学校や企業、観光地などが集まっており、区民だけでなく、通学者・通勤者・訪問者が多いという点が特色です。また、2万人を超える在住外国人は、総人口の約1割を占め、その国籍は134か国⁽¹⁾に及びます。区内には、都内最多となる80⁽²⁾の大使館があります。この国際色豊かな住民構成をふまえ、平成24（2012）年3月に策定された『港区国際化推進プラン 改訂版 平成24年度～平成26年度』や『第2次港区観光振興ビジョン』では、歴史文化資源を国際交流促進や観光振興の資源として見直し、活用することがうたわれました。今後、港区の自然・歴史文化資源を積極的に活用することで、国際交流や観光振興施策などにいっそう寄与することが求められます。

本来、地域の自然・歴史文化資源は、地域アイデンティティの拠り所として、地域住民のために存在するものでなければなりません。そのため、自然・歴史文化資源の保護は関係法規に則り、文化財行政の業務として行なわれてきました。今後も自然・歴史文化資源の保護業務は、地域行政のなかで重要な位置を占めるに相違ありません。一方、今日では、自然・歴史文化資源の発見や活用を求める声が増大しつつあります。そのため、自然・歴史文化資源の活用に、地域住民が積極的に参加し得る場と機会が設けられること、そのための適切なしくみが確立されることが求められています。その拠点として、資料館が存在する意義はきわめて大きいといえます。

註(1) 平成24年1月1日現在

註(2) 『港区国際化推進プラン 改訂版 平成24年度～平成26年度』（港区、2012年）

(5)新郷土資料館の開設

自然・歴史文化資源の保存と活用の新たな拠点づくり



今日、港区のまちは、さまざまところで大きく様変わりを続け、14年前には15万人を下回っていた人口は、21万人まで回復しました。新たな住民が増加したことを示しています。また、年少人口が過去10年間に45.5%増加⁽¹⁾したことは注目すべきで、住民の年齢構成にも変化が見られます。

このような、人々の動きによって生活環境や社会構造も変化しており、港区の自然や歴史、文化に対する関心やニーズも多様なものになっています。そのなかで、第一に自然・歴史文化資源を活用するさまざまな活動の拠点、第二に自然・歴史文化資源に関わる情報発信の拠点、第三に学校教育や生涯学習の拠点、そして第四に、こうした場や機会を通じて育まれる交流の拠点が必要とされ、これらの機能を持つことが、新郷土資料館に求められています。新郷土資料館への期待はますますたかまっています。

こうしたなか港区は、区内白金台四丁目に所在する、昭和13（1938）年竣工の旧国立保健医療科学院⁽²⁾を保存・改修し、新郷土資料館を開設することにいたしました。歴史的建造物としての価値をもつこの建物を、区の指定文化財として保存・活用する必要があること、平成17年度策定の『港区新郷土資料館第2次基本構想』で検討された新郷土資料館の開設を実現する上で十分な展示・収蔵などのスペースを確保できること、周辺に美術館などの文化教育施設もあり、国、都、区の指定文化財などの多くの自然・歴史文化資源に囲まれていることなど、港区の新たな資料館にふさわしい条件を備えたこの建物と場所に、新郷土資料館は開設されることになりました。

註(1)『港区基本計画・実施計画』（港区、2012年）
ここでいう年少とは0歳から14歳まで。

註(2)「3 開設地—旧国立保健医療科学院」の項を参照

2 展示等総合計画策定の経緯

(1)「開設準備委員会」設置までの経緯

平成7（1995）年7月に港区立新郷土資料館基本構想策定検討委員会を設置し、新郷土資料館の建設をめざした検討を開始しました。

その結果については、平成9（1997）年3月に「港区新郷土資料館基本構想」として策定しましたが、バブル経済崩壊後、港区の財政状況が厳しくなってきたことや社会情勢の変化の中で、実現にはいたりませんでした。

平成16（2004）年7月には、この基本構想の報告後7年が経過していることから、それを改訂するため、港区新郷土資料館基本構想検討委員会を設置しました。平成17（2005）年9月に同委員会は「港区新郷土資料館第2次基本構想」を策定しましたが、適当な候補地が見つからないまま6年が経過しました。

この間港区は、平成21（2009）年3月に旧国立保健医療科学院を取得し、住民説明会や施設見学会などを通じて地域の方々のご意見を伺いながら、旧国立保健医療科学院の整備活用に向けた検討を行ってきました。

また、あわせて耐震診断を実施した結果、適切な改修工事を行うことにより、耐震基準値を上回る耐震性能を確保できる見通しが立ったことをふまえ、歴史的な風格や趣を備えたこの建物を保全しながら、耐震化、バリアフリー化などの改修を行い、新郷土資料館をはじめとする複合施設として活用することを平成23（2011）年1月に決定しました。

これを受けて、旧国立保健医療科学院を歴史的建造物として残すとともに整備活用を進めるため、平成23（2011）年3月に旧国立保健医療科学院整備活用検討委員会を設置しました。そこで建物の整備活用計画の策定を開始する予定にしていたが、平成23年3月11日に発生した東日本大震災によって、区は計画中もしくは進行中の建物整備計画についても、安全性や緊急性などの観点から見直しを行うことになりました。その結果、旧国立保健医療科学院の整備活用は当初の予定から約1年延長することになりましたが、東日本大震災の教訓を活かした建物の総合的な利用計画とするために、関係諸機関との間で、防災機能の強化と文化財的価値の両立を図ることで現在、検討を行っています。

新郷土資料館については、旧国立保健医療科学院全体の整備活用基本計画策定に並行して、新郷土資料館の展示・事業・管理運営などの計画を検討するため、平成24（2012）年4月、「港区立新郷土資料館開設準備委員会設置要綱」を制定しました。それにもとづいて、学識経験者、公募区民ならびに区職員からなる港区立新郷土資料館開設準備委員会を設置、同年5月に第1回港区立新郷土資料館開設準備委員会を開催して以降、展示等総合計画の検討を進めてきました。

※参考資料（37 - 39頁）参照のこと

【経過】

平成 7年 9月	港区立新郷土資料館基本構想策定検討委員会設置要綱制定 学識経験者5名、区民など5名、区職員5名で構成 第1回港区立新郷土資料館基本構想策定検討委員会開催 港区立新郷土資料館基本構想検討開始
平成 9年 3月	港区新郷土資料館基本構想報告
平成16年 7月	港区新郷土資料館基本構想検討委員会設置要綱制定 学識経験者5名、区職員5名で構成
平成16年 8月	第1回港区新郷土資料館基本構想検討委員会開催 港区新郷土資料館第2次基本構想検討開始
平成17年 9月	港区新郷土資料館第2次基本構想報告
平成21年 3月	旧国立保健医療科学院を国との交換により取得
平成21年 6月	土地の取得に関する住民説明会
平成22年 1月	活用に関する住民説明会
平成22年 3月～4月	施設見学会
平成23年 1月	旧国立保健医療科学院に新郷土資料館、在宅緩和ケア支援施設、子育て関連施設、区民協働スペースなどの整備を決定
平成23年 3月	旧国立保健医療科学院整備活用検討委員会設置要綱を制定し、区内部検討組織設置
平成23年 5月	3月に発生した東日本大震災を踏まえ、安全性や緊急性などの観点から整備計画を見直しし、当初の予定から約1年延長した整備を決定
平成23年12月	旧国立保健医療科学院整備活用計画検討開始
平成24年 4月	港区立新郷土資料館開設準備委員会設置要綱を制定 学識経験者7名、公募区民3名、区職員4名で構成
平成24年 5月	第1回港区立新郷土資料館開設準備委員会開催 展示等総合計画検討開始
平成25年 3月	港区立新郷土資料館展示等総合計画（素案）策定
平成25年 5月	区民意見募集
平成25年 5月～6月	旧国立保健医療科学院整備活用基本計画（素案）に関する住民説明会
平成25年 8月	港区立新郷土資料館展示等総合計画策定

3 開設地 — 旧国立保健医療科学院

(1) 建物の概要

所在地：港区白金台四丁目6番
規模：地下2階、地上5階、塔屋3階
建築面積 2,923.09㎡ (884.459坪)
延床面積 15,090.75㎡ (4,564.748坪)
高さ塔屋まで 約36.20m
5階まで 約23.10m
構造：鉄骨・鉄筋コンクリート造
起工：昭和10（1935）年3月
竣工：昭和13（1938）年10月
設計者：内田祥三
監督者：公衆衛生院建築部
施工：大倉土木株式会社（現・大成建設株式会社）
※『建築雑誌』昭和14年2月号を元に建設当初の数値を記載



(2) 建物の沿革

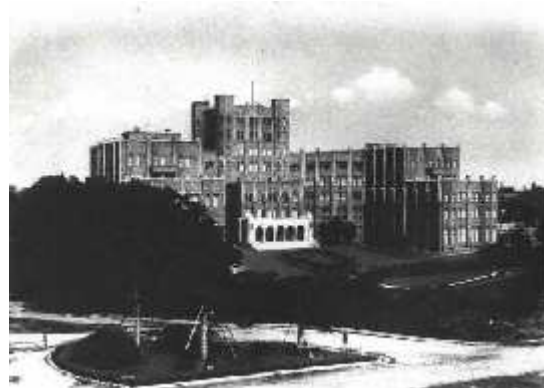
本建物は、昭和13（1938）年10月に公衆衛生院として厚生省の元に設置されました。設計は、東京帝国大学教授であった内田祥三（明治18年2月～昭和47年12月）によるもので、施工は大倉土木（現在の大成建設）が担当し、公衆衛生院建築部長佐藤茂助、工務課長清水幸重が監督にあたりました。米国ロックフェラー財団から経済的援助を受け、建設されました。外観は、隣地に既設されていた東京帝国大学伝染病研究所（現在の東京大学医科学研究所）にあわせています。地下2階、地上5階の上に塔屋3階、合計約15,000㎡の延床面積に、公衆衛生を目的とした各種実験室、研究室、教室や340名を収容できる講堂、書庫、閲覧室、展示室に、食堂や研究生たちの寄宿施設が配置されていました。構造は、鉄骨・鉄筋コンクリート造で、温水暖房及び一部に蒸気暖房が設置され、建設当初からエレベーターも3基設置されていました。塔屋まで36mの高さを誇り、木造の住宅が建ち並んでいた白金台の高台に現したその姿は、港区内各所からも見ることができたようです。

港区が取得するまでの間、窓サッシの変更、5階寄宿舎の研究室への改修、各実験施設などの新設・更新など、内外部においてさまざまな改修が行われましたが、電灯器具や木製・鉄製扉など、建設当初と思われる状態が残っている部屋が多くあります。

なお、公衆衛生院は平成14（2002）年に組織が改組され国立保健医療科学院となり、埼玉県和光市に移転しました。



昭和12年3月
（『国立公衆衛生院五十周年記念誌』より）



昭和13年11月（同上）



中央階段ホール・吹き抜け



中央階段ホール吹き抜け上部



講 堂

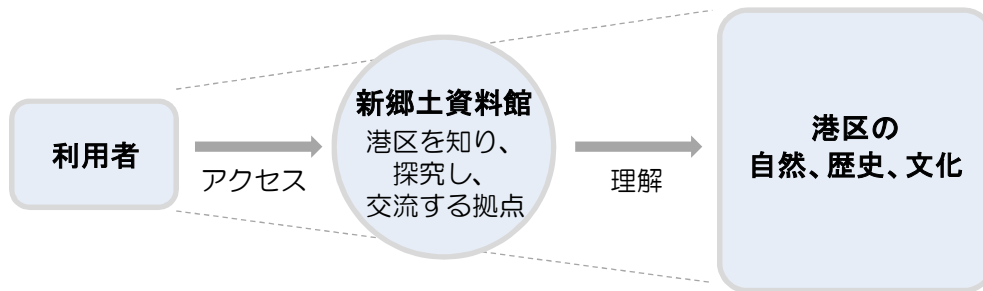


土星型の照明器具

II 基本的な考え方

1 設置の目的

誰もが、自然、歴史、文化をとおして港区を知り、探求し、交流する拠点づくり



港区は、多彩な自然、歴史、文化に恵まれています。これらの資源を保全し、次世代に継承することは、現代に生きる私たちの責務です。同時に私たちは、誰もが、自然・歴史文化資源の活用をとおして、港区の自然、歴史、文化について学ぶことの楽しさを知り、交流を通じてその喜びを分かちあい、こうした活動の中から新たな価値を創造することを大切にします。これらの活動を通じて得た知見や情報をもとに、協力して地域づくりやまちづくりを行うための場と機会を提供することが必要だと考えます。

私たちは、この場・機会を提供するに最もふさわしい新郷土資料館を、「誰もが、自然、歴史、文化をとおして港区を知り、探求し、交流する拠点」にします。

新郷土資料館にすれば港区のことは何でもわかり、新郷土資料館での経験や体験が、港区への愛着と誇りを育む契機・機会になることを期待しています。私たちは、新郷土資料館が保有する有形・無形の資源—資料・人材・施設など—を利用者と一緒に活かしながら、新たな自然・歴史文化資源の発見・保全・継承を通じて、自然、歴史、文化に根ざした港区の地域づくり・まちづくりに寄与することをめざします。

2 対象

全ての港区民

在住外国人を含む全ての区民

港区を訪れる人々

通勤・通学などで訪れる人々
国内外からの観光客
港区にゆかりのある人々
港区の自然、歴史、文化に興味や関心がある人々

※区民をはじめとし、新郷土資料館を利用する上記対象者を以下「利用者」という。

3 理念

3つのCをとおして港区への愛着と誇りを育み、新たな地域づくりに寄与する。

Collection

港区の自然・歴史文化資源の蓄積と継承

Communication

港区の自然・歴史文化資源に関わる情報の発信と交流

Creation

港区の自然・歴史文化資源の再発見と評価を通じた新たな価値の創造

新郷土資料館は、先に示した目的を達成するため、次の3つの理念を掲げます。

(1) 港区の自然・歴史文化資源の蓄積と継承 (Collection)

新郷土資料館は、港区の自然、歴史、文化について知りたい、学びたい、探求したいという区内外からの要望に responding していくため、有形・無形の資料の収集・保存、調査・研究を進め、港区の自然・歴史文化資源を充実させていきます。それらを区民共有の財産として蓄え、次世代に確実に伝えます。

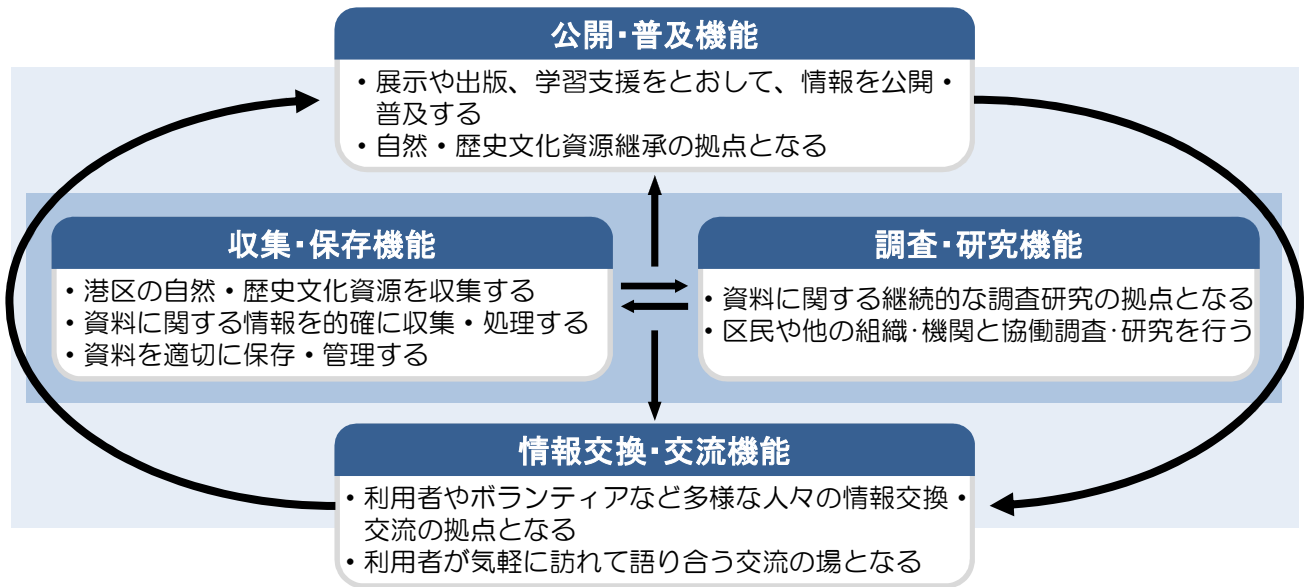
(2) 港区の自然・歴史文化資源に関わる情報の発信と交流 (Communication)

新郷土資料館は、過去から受け継いだ資料や情報を、現代および次世代の人々に伝え、活用されるように広く公開するとともに、関連する情報も発信します。こうした活動を推し進め、さまざまな利用者が、さまざまな人々とさまざまな形で交流することを促します。

(3) 港区の自然・歴史文化資源の再発見と評価を通じた新たな価値の創造 (Creation)

区と利用者は、新郷土資料館での活動の積み重ねによって、知ることを楽しみを分かち合いながら、港区の自然、歴史、文化を見直し、港区の新たな価値を発見・創造していきます。新郷土資料館は、区と利用者が協働して、豊かで多様な自然、文化に抱かれた港区の歴史を刻み続ける拠点となります。

4 機能



新郷土資料館は、3つの理念を具現化するため、次の4つの機能を有します。

(1) 収集・保存機能

- ・自然・歴史文化資源を収集する機能
利用者にとって貴重な財産である、港区に関わる自然・歴史文化資源を中心に収集し、その充実を図ります。
- ・的確な情報処理を行う拠点としての機能
自然・歴史文化資源を収集するとともに、これらに関わるさまざまな情報を集め、資料とともに情報も収蔵します。
- ・資料の保存・管理機能
収蔵された資料を、適切な防災・防犯設備、温湿度管理により被災、盗難、劣化などから守り、また必要に応じて理化学的処理を行い、永続的に保存します。

(2) 調査・研究機能

- ・調査・研究を継続的に実施する拠点機能
収集資料とこれらに関する情報を豊富にし、質をたかめ、これらを利用者に信頼性の高い形で提供するために調査・研究を継続的に実施します。
- ・他の組織・機関との協働調査・研究を進める機能
区内博物館、大学、区民による自主的研究会など、都内・国内外の他の組織・機関との協働調査・研究を進めるための機能の充実を図ります。

(3) 公開・普及機能

- ・情報の公開及び、普及のための機能
展示、出版、インターネットを通じた情報発信をはじめ、これからの港区を担う児童・生徒への教育普及、ワークショップを通じた自主的な生涯学習への支援などをとおし、情報の公開及び普及を行い、利用者と新郷土資料館をつなぎます。
- ・自然・歴史文化資源を継承する機能
先人が残した港区の自然・歴史文化資源を次代に伝える責務を果たすための拠点施設として機能します。

(4) 情報交換・交流機能

- ・ 情報交換・交流・新たな価値を創造する拠点としての機能
適正な人的資源の確保は、何より重要な要素です。利用者をはじめ、学芸員など資料館職員、ボランティア、サポーター、協働調査・研究者などの人々の情報交換・交流活動などの拠点や新たな価値を創造することができる拠点とします。
- ・ 利用者の交流の場としての機能
展示見学やさまざまな活動への参加だけでなく、休憩や食事などにも利用者が気軽に訪れて語り合う交流の場をつくります。

5 整備の方針

(1) 貴重な建物や資料を適切に保存・保全し、その価値を後世に伝えるための環境を整備する

- ・ 新郷土資料館が整備される旧国立保健医療科学院は、昭和13（1938）年の竣工で、築70年を超える歴史的建造物として、建物そのものが新郷土資料館の資料です。新郷土資料館は、建物そのものを港区の歴史文化資源として保存・保全します。あわせて、建物の文化財的価値、建物に刻み込まれた歴史を次世代に継承します。
- ・ 港区の自然・歴史文化資源とこれに関する情報を、新郷土資料館の資料として収集・保存し、調査・研究を進め、これらを次世代に継承する活動拠点とするばかりでなく、国内外に散在する港区の自然・歴史文化資源とこれに関する情報を調査・研究し、収集・保存する活動の拠点とします。

(2) 利用者と区内外・国内外の人々や施設などをつなぐ活動を展開する

- ・ 利用者が、地域と地域に関わる人々や、館外にある自然・歴史文化資源、区内にある大学、博物館・美術館などの文化・教育施設とつながりを持ち、交流を深める施設とします。
- ・ 利用者が、国内外の博物館など文化・教育施設が所蔵している港区の自然、歴史、文化に関する資料・情報や研究成果を知り、学ぶため、利用者と国内外の文化・教育施設をつなぐ拠点とします。

(3) 利用者や他施設・機関などとの協働によって活動するしくみを整備する

- ・ 港区の自然・歴史文化資源に関する情報収集、調査・研究などの諸活動を区民と協働で行うとともに、港区の自然、歴史、文化について区民が学習し、その成果を公開する機会や、資料・情報を区民とともに発信するしくみを、整備・提供します。
- ・ 港区の自然、歴史、文化に関わる調査・研究などの活動を、大学、博物館・美術館など文化・教育機関と取り組み、その成果を公開する場と機会、あるいは運営などに反映できるしくみを整備します。

(4) 利用者が繰り返し訪れたい事業展開を行う

- ・ 利用者の多様な関心や時代の変化に応じて柔軟に事業を展開し、何度でも訪れ、活用しやすくなる施設とします。

III 展示計画

1 基本的な考え方

誰が来ても、いつ来ても、港区の新たな魅力に出会える展示

展示は、利用者が港区の自然、歴史、文化を知り、学び、探求することを支え、また利用者にとって展示はさまざまな形の交流をもつきっかけとなります。新郷土資料館は、「誰が来ても、いつ来ても、港区の新たな魅力に出会える展示」を、歴史的価値のある建物を活かしながら、次の基本的な考え方に基づき計画します。

(1) 誰もが興味や知識に応じて港区の自然、歴史、文化に親しみ、世界へと視野を広げられる展示

利用者がそれぞれの興味や知識に応じて、港区の自然、歴史、文化にアプローチし、港区について知ることを通じて世界へと視野を広げることができるよう、わかりやすく、楽しめる多角的な展示をめざします。

(2) いつ来ても新しい発見のある、柔軟で更新性の高い展示

利用者が来館するたびに新たな発見につながるよう、港区の自然、歴史、文化に関する最新の情報の更新や追加が容易に行える可変性の高い展示を創出します。

(3) 地域づくりの寄与へつながるメッセージ性のある展示

利用者が自然、歴史、文化に根ざした愛着と誇りの持てる港区の地域づくりへ寄与するという視点から、利用者へ押し付けにならないよう工夫をしながら、メッセージの発信が可能となる展示をめざします。

(4) 資料を五感で楽しみ、長く記憶に留まる体験・体感型の展示

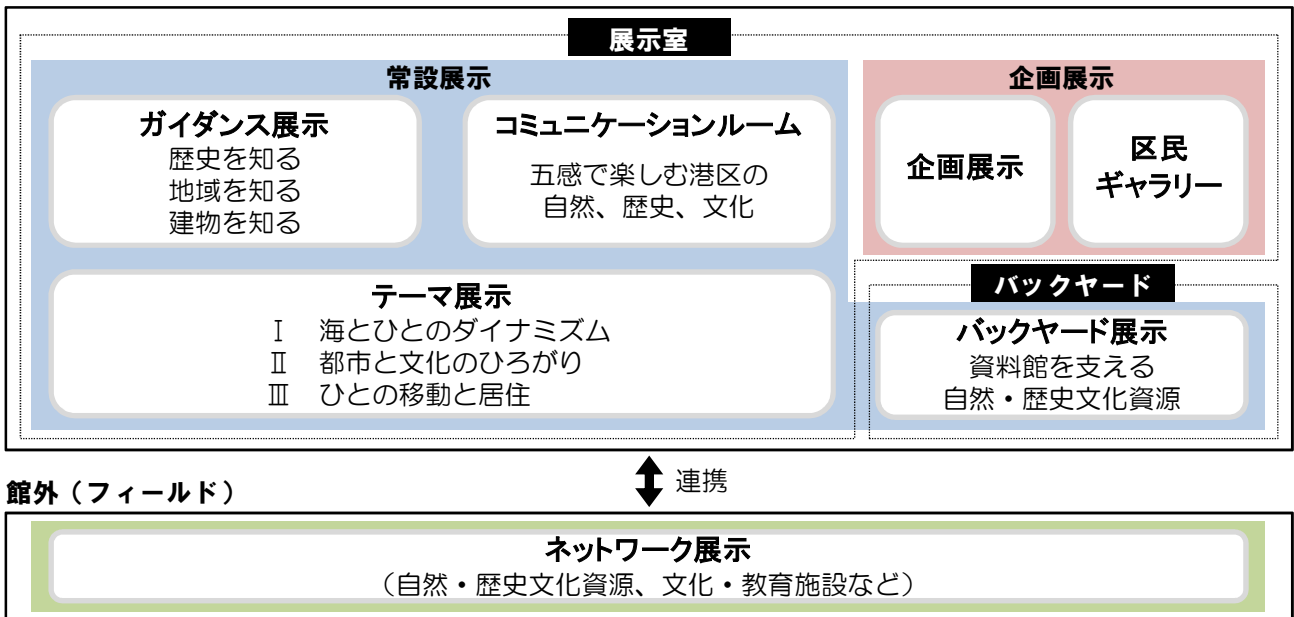
資料を身近に感じ、触れることで、新郷土資料館で見聞きし、学んだことの理解が一層深まり、新郷土資料館での経験が長く記憶に留まるよう、体験・体感型の展示の充実を図ります。

(5) 利用者が自然、歴史、文化をともに語り、綴ることができる参加・協働型の展示

利用者が参加する、または利用者と協働でつくる展示により、利用者が港区の自然、歴史、文化を語り、伝え、新たに創出する主役となることをめざします。

2 展示の種類

新郷土資料館



展示は大きく、常設展示、企画展示、ネットワーク展示によって構成されます。ただし、新郷土資料館の常設展示は従来と異なり、1年から長くとも10年を目途に更新し、また資料の入れ替えを適宜行うなど、「いつ来ても新しい発見」につながる変化と躍動感に富んだものとしします。

(1) 常設展示

常設展示は、港区のあらましを紹介する「ガイダンス展示」、港区の自然、歴史、文化に関する特徴的なテーマによって構成される「テーマ展示」を基本として組み立てます。

また、港区の自然、歴史、文化を五感で体験・体感しながら学芸員との交流を楽しむ「コミュニケーションルーム」、展示室で展示できない大型収蔵資料などを公開する「バックヤード展示」を、常設展示の一環として展開します。

① ガイダンス展示

「港区を知る契機」としての導入展示です。ガイダンス展示は、港区の自然、歴史、文化のあらましを紹介する「歴史を知る」、5地区の行政区分に基づき各地区の自然、歴史、文化の特徴を紹介する「地域を知る」、旧国立保健医療科学院の建物の特徴や文化財的価値を紹介する「建物を知る」の三つのコーナーによって構成し、長くとも10年を目途に更新します。ガイダンス展示では、「過去から現代へ」「現代から過去へ」、また「全体から地区へ」「地区から全体へ」を理念として、「港区史」と「港区域」が交差する、いわば「港区の時と空間の交差点」を創出します。

② テーマ展示

新郷土資料館の根幹を成す展示です。テーマ展示は、港区の自然、歴史、文化に関する興味深い、特徴的な大テーマのもとに、複数の中・小テーマを組み合わせで構築します。さらに、それらを補い、より多角的な視点から理解するためのトピックを扱う展示を適宜組み合わせることで、変化に富んだ組み立てとします。テーマ展示では更新性・可変性の高い展示手法を取り入れ、大テーマは10年程度を目安に見直し、中・小テーマは1～2年を目処に、容易に更新できるものとし、あわせて利用者の要望や時々の要請にも即応できるシステムの構築を図ります。

③コミュニケーションルーム

港区の自然、歴史、文化を五感で体験・体感しながら、学芸員との交流を楽しみます。本物の資料に直にさわることはもとより、たとえば顕微鏡などを用いての資料観察、まちなかで採集した都会の音の聞き比べなど、港区の自然・歴史文化資源にさまざまな角度からアプローチします。学芸員からのアドバイスのもとで資料にふれたり、体験・体感の感想や疑問について学芸員と話すことで、港区の自然、歴史、文化への関心や愛着をいっそうたかめる場とします。この展示空間での経験をもとに、調査・研究や、製作実験などの体験学習に利用者を誘います。

④バックヤード展示

豊富な考古資料（遺跡出土遺物）、展示に供することが困難な建築部材や民具などを、収蔵状態とあわせて紹介します。さらに、新郷土資料館の舞台裏を見て、知っていただくバックヤードツアーに利用者を誘います。

(2) 企画展示

①企画展示

企画展示は、港区の自然、歴史、文化に関わるテーマを中心に、期間を定めて、独立した空間で実施するものです。新郷土資料館が独自に行う展示はもとより、利用者や大学などの文化・教育機関との協働によって行う展示の開催をめざします。このため新郷土資料館では、利用者や大学などの文化・教育機関が企画展示の企画・運営に参画するしくみを構築します。

②区民ギャラリー

港区の自然、歴史、文化の自主学習グループ、大学などの文化・教育機関、港区内の企業などが、調査・研究成果の公開などに利用できる場として、区民ギャラリーを整備します。利用期間・方法について一定の基準を設けた上で、それぞれの関心にもとづいて気軽に利用できる場を提供することで、利用者同士の交流をはぐくむ機会を提供します。

(3) ネットワーク展示

港区内には、史跡・遺跡など多くの自然・歴史文化資源が存在します。また、大学、博物館など文化・教育施設も豊富で、さらに近年では、さまざまな区有施設が港区の自然、歴史、文化を紹介する機会・場を設けています。新郷土資料館では、こうした施設と連携したネットワーク展示の展開をめざします。

ネットワーク展示では、区内の史跡・遺跡などのフィールドや文化・教育施設における新郷土資料館の紹介、または新郷土資料館が所蔵する自然・歴史文化資源の展示をとおして、それを見た人が新郷土資料館に訪れるきっかけをつくります。また、新郷土資料館の展示において、関係する史跡・遺跡などのフィールドや、他施設が所蔵する自然・歴史文化資源の紹介を行い、新郷土資料館を入口として区内の自然・歴史文化資源や文化・教育施設へと足を向けるきっかけを利用者に提供するなど、相互的なネットワークを構築します。ネットワーク展示をとおして、新郷土資料館と他施設、あるいは他施設間の交流を図り、利用者が港区の自然・歴史文化資源に触れる機会を増やします。

3 展示の構成案

(1) 常設展示

① ガイダンス展示

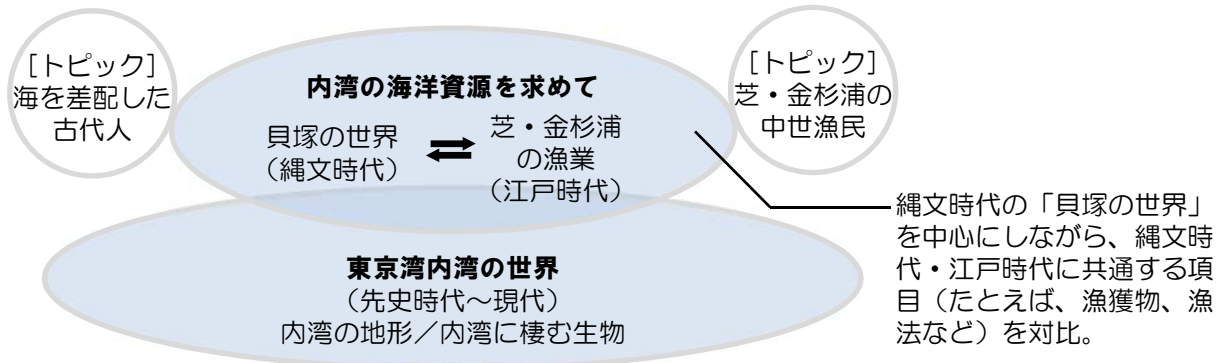


歴史を知る	港区の自然・歴史・文化のあらましを理解する導入展示	
展示項目	展示概要	主な展示資料
港区の地勢	港区の地形を、三次元画像、模型などを組み合わせ、地形の特性、変遷、陸と海との地形上の関わりなどを紹介します。	解説グラフィックパネル・写真パネル・地形模型・プロジェクションマッピング・ナウマン像化石・洪積世貝化石 など
港区の自然	港区の自然の移り変わりや、都会ならではの自然環境の特質を紹介。建物前の庭につくられた池を活用。	解説グラフィックパネル・写真パネル・港区みどりと生きものマップ・動植物標本 など
港区のあゆみ	港区域で人びとの活動が始まった約3万年前から、今日までの港区の移り変わりを、古代（旧石器時代～奈良・平安時代）・中世（鎌倉・室町時代）・近世（安土・桃山時代～江戸時代）・近代（明治時代～昭和・戦時期）・現代（昭和・戦後期～現在）の順に、各時代の様子を理解する上で一助となる資料と共に紹介。	解説グラフィックパネル 写真パネル 各時代を特徴付ける資料（当初展示例） ・古代：遺跡出土古代遺物 ・中世：板碑 ・近世：増上寺文書 ・近代：古写真 ・現代：家電
地域を知る	芝・麻布・赤坂・高輪・芝浦港南地区の地域特徴、地域の成り立ちとその後の移り変わりを紹介。「歴史を知る」と対になる導入展示。	
芝地区	まち・ひと・風情	解説グラフィックパネル 写真パネル
麻布地区	まち・ひと・風情	
赤坂地区	まち・ひと・風情	
高輪地区	まち・ひと・風情	
芝浦港南地区	まち・ひと・風情	
建物を知る	公衆衛生院（旧国立保健医療科学院）の建物そのものと、これに関わる歴史を紹介。	
公衆衛生の歴史と公衆衛生院 内田祥三の事績と公衆衛生院	公衆衛生院建物、公衆衛生史関係資料、内田祥三関係資料 など	

②テーマ展示

大テーマⅠ 海とひとのダイナミズム

古くから海との関わり合いの中で時を刻んできた港区域を、その特徴が最も顕著に表れる貝塚、内湾漁業に注目して紹介。

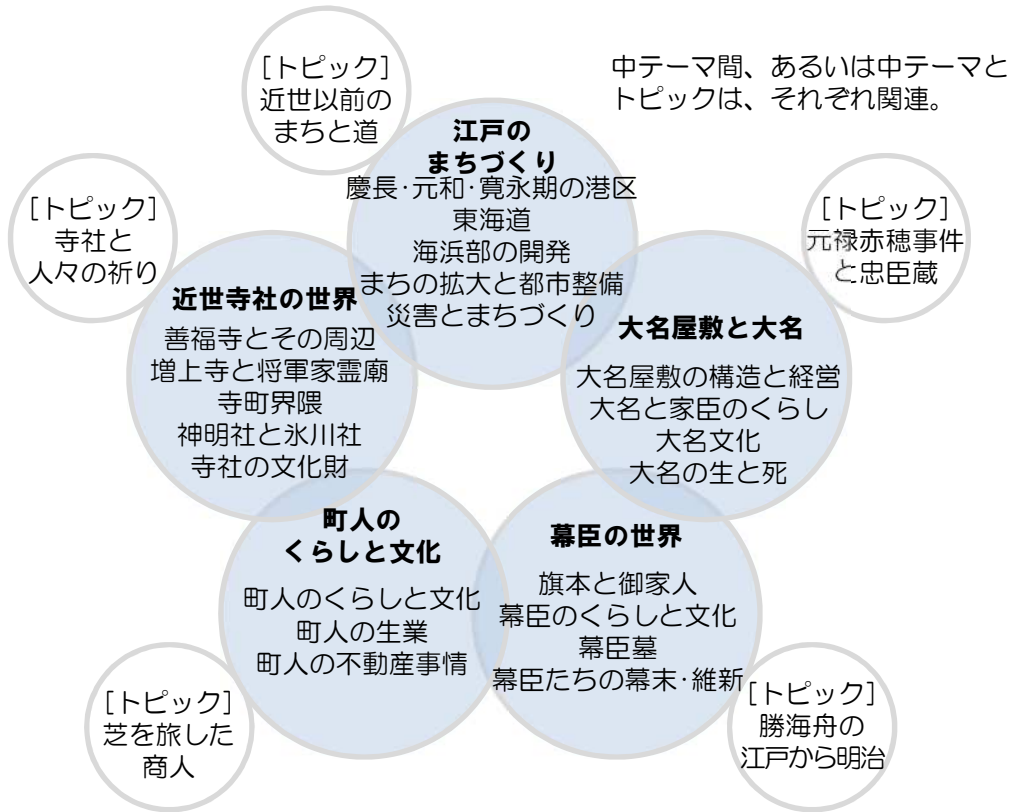


大テーマⅠ 海とひとのダイナミズム		
古くから海との関わり合いのなかで時を刻んできた港区域を、その特徴が最も顕著に表れる貝塚、内湾漁業に着目して紹介します。		
中テーマ	小テーマ	主な展示資料
東京湾内湾の世界 港区が面する東京湾内湾の環境を、現代に至る遷移を追いながら紹介。	▶内湾の地形 ▶内湾に棲む生物	・海洋生物 ・水産図譜 など
内湾の海洋資源を求めて 縄文時代から戦後間もない頃まで行われた内湾漁業、近年の海洋環境再生の試みの様子をおして、海とひとの関わり合いを紹介。	▶貝塚の世界 ▶芝・金杉浦の漁業 ▶環境再生	・貝塚転写標本（伊皿子貝塚・西久保八幡貝塚・雑魚場跡）、貝塚（伊皿子貝塚・西久保八幡貝塚）出土遺物 ・漁具・海苔養殖具、「元禄焼印札」、漁業起立、浮世絵 など
トピック	海を差配した古代人-芝丸山古墳とその周辺	・丸山古墳出土遺物、阿部正功関係資料 など
トピック	芝・金杉浦の中世漁民-内湾漁業集落の形成	・「北条家朱印状写」など

※環境再生…海洋生物の生態展示について検討

大テーマⅡ 都市と文化のひろがり

江戸幕府の大規模開発によって都市として成立し、地域的发展を遂げた江戸時代の港区を、前代の様子や前代からの移り変わりとともに、5つの中テーマで紹介。



大テーマⅡ 都市と文化のひろがり		
<p>港区域は、江戸幕府による大規模開発によって生まれた都市です。江戸時代の初頭には増上寺が芝に移され、江戸城外堀に沿って大名屋敷などの宅地開発が進みます。間もなく市街の範囲は、今日の港区の縁辺部に拡大します。上下水道などの都市インフラの整備が進み、大名屋敷を中心とする武家屋敷、多くの寺社が軒を並べます。町人地は面積こそ限られますが、寺社門前町など独特の空間が創出された場も少なくありません。都市として成立し、地域的发展を遂げた江戸時代の港区を紹介します。</p>		
中テーマ	小テーマ	主な展示資料
<p>江戸のまちづくり 慶長期から寛永期にかけて幕府によって進められた都市造成の在り方と、その後の移り変わり、その背景となる前代の様子を紹介。</p>	<p>▶慶長・元和・寛永期の港区 ▶東海道 ▶海浜部の開発 ▶まちの拡大と都市整備 ▶災害とまちづくり</p>	<p>・浮世絵、江戸図、江戸地誌、愛宕下遺跡などの出土遺物など</p>
トピック	近世以前のまちと道	<p>・「更科日記」、「江亭記」、遺跡出土中世遺物 など</p>

<p>大名屋敷と大名 港区域に屋敷を構えた約140藩の大名の屋敷、くらし、動向などを、家臣の活動などとともに紹介。</p>	<p>▶大名屋敷の構造と経営 ▶大名と家臣のくらし ▶大名文化 ▶大名の生と死</p>	<p>・大名屋敷跡遺跡出土遺物、江戸藩邸図、藩政資料、大名家出産関係資料・葬儀関係資料、菩提寺所蔵文化財、台場関係資料など</p>
<p>トピック</p>	<p>元禄赤穂事件と忠臣蔵</p>	<p>・浮世絵、肥後熊本藩細川家屋敷跡遺跡出土酒罎 など</p>
<p>幕臣の世界 港区域に住んでいた幕臣-旗本・御家人-のくらし、葬送、動向などを、幕末から維新直後にかけての時代の波に翻弄された姿をまじえて紹介。</p>	<p>▶旗本と御家人 ▶幕臣のくらしと文化 ▶幕臣墓 ▶幕臣たちの幕末・維新</p>	<p>・幕臣屋敷跡遺跡出土遺物、幕臣墓出土遺物、幕臣関係文書など</p>
<p>トピック</p>	<p>勝海舟の江戸から明治</p>	<p>・勝海舟邸跡出土遺物、勝海舟邸敷地図 など</p>
<p>町人のくらしと文化 港区域に居住し、あるいは往来した町人のくらし振り、生業、文化などを紹介。</p>	<p>▶町人のくらしと文化 ▶町人の生業 ▶町人の不動産事情</p>	<p>・浮世絵、町屋跡遺跡出土遺物、商人関係文書、麻布本村町沽券図・兼房町沽券図断簡 など</p>
<p>トピック</p>	<p>芝を旅した商人</p>	<p>・在府中日記、芝大神宮・増上寺境内図 など</p>
<p>近世寺社の世界 近世以前に創建された善福寺等の古刹、浄土宗東の総本山である増上寺、三田をはじめとする寺町、など、港区の地域的特徴の一つといえる寺院と港区との関係を、区内に鎮座する神社とあわせて紹介。</p>	<p>▶善福寺とその周辺 ▶増上寺と将軍家霊廟 ▶寺町界限 ▶神明社と氷川社 ▶寺社の文化財</p>	<p>・善福寺関係資料、増上寺及び将軍家霊廟関係資料、芝大神宮・赤坂氷川神社・麻布氷川神社関係資料、区内寺院・神社所蔵文化財 など</p>
<p>トピック</p>	<p>寺社と人々の祈り</p>	<p>・魚籃観世音菩薩畧縁起 など</p>

大テーマⅢ ひとの移動と居住

区の地的特性であり、社会状況をよく映し出す、人々の移動と居住の歴史を基盤として、いくつかの中テーマから港区の近・現代史を重層的に紹介。

明治	大正	昭和	平成
国際化に見る 港区の近・現代			
幕末の外国公館/台場築造と対外施策/滞在する外国人・定住する外国人/外国人の受容と排除/国際社会のなかの港区			
[トピック] 洋館のあるまち			
交通・運輸に見る 港区の近・現代			
鉄道の敷設と交通網の発達/道路網整備と舟運の衰退/港湾整備と海運/交通網の整備とまちの変化			
[トピック] 放送とメディア			
教育・文化に見る 港区の近・現代			
初・中等教育の成立と展開/高等教育機関の設置と展開/さまざまな教育機関の歴史/医学教育と公衆衛生院/大衆文化			
[トピック] 福澤諭吉と近代教育			
災害・戦争に見る 港区の近・現代			
関東大震災と港区/戦争の時代の港区/戦後復興と港区/新たな都市災害とまちづくり			
[トピック] 連隊のあるまち			
生業・産業に見る 港区の近・現代			
内湾漁業から遊船業へ/近代工業の成立と展開/家具製造業と出版業/勤工場からブランドショップまで/繁華街の成立とまちの変容/都市観光と港区			
[トピック] 新たな観光地の出現			

大テーマⅢ ひとの移動と居住		
港区の地的特性に、間断なく続く、さまざまな形態での人々の出入りを挙げるすることができます。たとえば人口動態では、幕末から明治維新の混乱期、震災・戦災期、大規模開発事業創始期に顕著な変化を見ることができ、これにより社会構造なども画期を迎えます。新郷土資料館では、社会状況を非常によく映し出すと見られる人々の移動と居住の推移を基盤とし、国際化などのいくつかの中テーマから港区の近・現代史を重層的に紹介します。		
中テーマ	小テーマ	主な展示資料
国際化に見る港区の近・現代 幕末・維新时期に始まり、今なお続く港区の国際化によってもたらされている、社会、文化、暮らしの変化などを、外国人・日本人双方の視点から紹介。	▶幕末の外国公館 ▶台場築造と対外施策 ▶滞在する外国人・定住する外国人 ▶外国人の受容と排除 ▶国際社会のなかの港区	・幕末外国公館関係資料（含、汐留遺跡・善福寺寺域遺跡出土遺物）、台場関係資料（絵図・文書・出土遺物ほか） など
トピック	洋館のあるまち-住いと暮らしの西洋化	・家具・建具、住宅関係資料（図面・カタログほか）、遺跡出土器物 など

<p>交通・運輸に見る港区の近・現代 鉄道敷設と鉄道駅の開設、道路網と港湾の整備、新たな交通システムの導入など、ひとの移動や暮らしに多大な影響を与える交通・運輸の視点から、近・現代の港区を紹介。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶鉄道の敷設と交通網の発達 ▶道路網整備と舟運の衰退 ▶港湾整備と海運 ▶交通網の整備とまちの変化 	<ul style="list-style-type: none"> ・汐留遺跡出土鉄道関係資料、古写真・航空写真、浮世絵 など
<p>トピック</p>	<p>放送とメディア-最初のラジオ放送からメディアセンターとなるまで</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・NHK放送関係資料、東京タワー関係資料 など
<p>教育・文化に見る港区の近・現代 近代初頭教育発祥から今日に至るまでの、文教地区としての港区の変遷を、統廃合により閉校となった区立学校の歴史とともに紹介。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶初・中等教育の成立と展開 ▶高等教育機関の設置と展開 ▶さまざまな教育機関の歴史 ▶医学教育と公衆衛生院 ▶大衆文化 	<ul style="list-style-type: none"> ・慶應義塾・攻玉社跡地出土遺物、学校歴史資料 など
<p>トピック</p>	<p>福澤諭吉と近代教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・福澤諭吉・慶應義塾関係資料 など
<p>災害・戦争に見る港区の近・現代 港区の近・現代史にとって重要な意味をもつ関東大震災とアジア・太平洋戦争を中心に、災害・戦争の港区史を紹介。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶関東大震災と港区-被災と復興 ▶戦争の時代の港区-日清・日露戦争からアジア・太平洋戦争まで ▶戦後復興と港区 ▶新たな都市災害とまちづくり 	<ul style="list-style-type: none"> ・グラフ雑誌、軍関係資料、都市計画関連資料、遺跡出土戦争関係遺物 など
<p>トピック</p>	<p>連隊のあるまち</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・歩兵第一・第三連隊、近衛歩兵連隊関係資料 など
<p>生業・産業に見る港区の近・現代 近世以来の伝統的な生業・産業の近代以降の変遷、近代に成立した産業の展開、戦後急速に進展した観光業など、生業・産業に見られる近・現代の港区の特質を紹介。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶内湾漁業から遊船業へ ▶近代工業の成立と展開 ▶家具製造業と出版業 ▶勸工場からブランドショップまで ▶繁華街の成立とまちの変容 ▶都市観光と港区 	<ul style="list-style-type: none"> ・魚仲買関係資料、芝家具製造関係資料、グラフ誌、近代地誌、写真 など
<p>トピック</p>	<p>新たな観光地の出現</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・グラフ雑誌、写真 など

③コミュニケーションルーム

コーナー名	展示項目	主な展示資料
五感で楽しむ 港区の自然、歴史、文化 本物の資料を五感で楽しみながら、港区の自然、歴史、文化をとおして学芸員と交流。	▶本物の資料にさわる ▶資料の奥や裏をのぞく ▶自然や生活の音を聞く ▶遺跡の匂いをかぐ ▶伝統を味わう	・骨格標本、土器・石器、民具、浮世絵・江戸図（画像データとともに） など

④バックヤード展示

コーナー名	展示項目	主な展示資料
資料館を支える 自然・歴史文化資源 豊富な考古資料（遺跡出土遺物）、展示に供することが困難な建築部材・民具などを、収蔵状態とあわせて紹介。	—	・考古資料、大型照明器具、民具 など

(2)企画展示

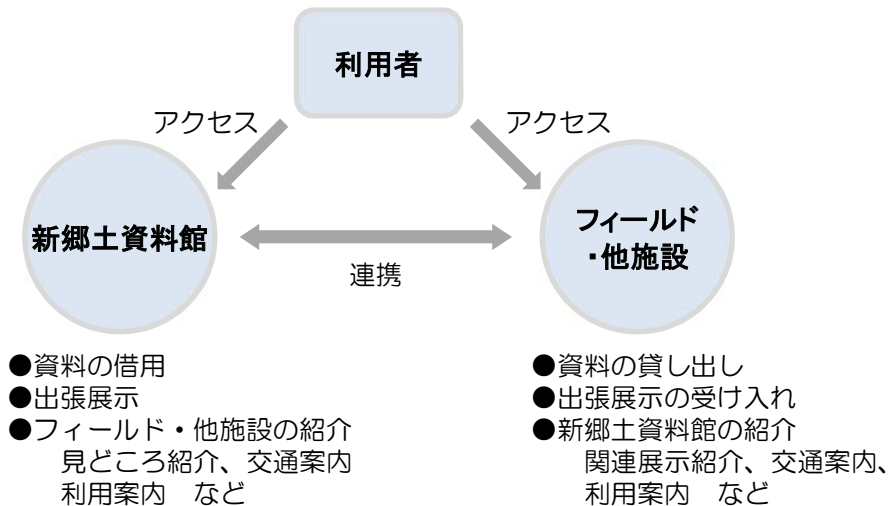
①企画展示

コーナー名	過去の特別展・企画展テーマ例	
さまざまな視点でとらえる港区の自然、歴史、文化 港区の自然、歴史、文化に関わるテーマを中心に、期間を定めて実施。	特別展	愛宕山 —江戸から東京へ—
		江戸図の世界
		増上寺徳川家霊廟
		悠久の旅人 —過去から、そして未来へ— 港区指定文化財30年の軌跡
		東京ミッドタウン前史 赤坂檜町の三万年 —旧石器～長州藩下屋敷～歩兵第一連隊—
		UKIYO-E(うきよえ) —名所と版元—
		江戸の外国公使館
		鍋島と伊万里の世界 —その美と意匠の裏に隠された歴史を追う—
		のぞいて見よう！ 大名の家づくりとその暮らし —汐留遺跡展パート2—
		江戸動物図鑑 —出会う・暮らす・愛でる—
		いろ・COLOR(いろ)な話
		伊達騒動の時代 —仙台藩伊達家第四代藩主伊達綱村と嫡子扇千代—
		企画展
		尾崎紅葉と港区

②区民ギャラリー

コーナー名	近年の区民参加展示例
つくる・つたえる・つながるギャラリー 自主学習グループ、文化・教育機関、企業などが、調査・研究成果の公開などに利用	絵画展～PEACE ART 未来へ～ 主催：港区障害者福祉課、伊藤忠商事株式会社 会期：2013年3月5日～3月11日 会場：伊藤忠青山アートスクエア
	「麻布未来写真館」パネル展 主催：港区麻布地区総合支所 会期：2013年2月1日～3月15日 会場：フジフィルムスクエア、東洋英和女学院、ありすの杜南麻布、港区麻布地区総合支所、港区役所

(3)ネットワーク展示



ネットワーク展示が想定されるテーマ例、及び連携先の候補となるフィールド・他施設の例は以下のとおりです。なお、各テーマやフィールド・他施設については、今後さらに検討・調整を行います。

新郷土資料館 関連テーマ例	フィールド・他施設例
[ガイダンス展示] 地区を知る	各総合支所
[テーマⅠ 海とひとのダイナミズム] 内湾の海洋資源を求めて	三田台公園
[テーマⅠ 海とひとのダイナミズム] 東京湾内湾の世界	東京海洋大学
[テーマⅡ 都市と文化のひろがり] トピック 勝海舟の江戸から明治	勝海舟邸跡
[テーマⅡ 都市と文化のひろがり] 近世寺社の世界	増上寺、芝大神宮 など
[テーマⅢ 人の移動と居住] 交通・運輸に見る港区の近・現代	旧新橋停車場鉄道歴史展示室
[テーマⅢ 人の移動と居住] トピック 放送とメディア	NHK放送博物館
[テーマⅢ 人の移動と居住] 教育・文化に見る港区の近・現代	慶應義塾大学

IV 事業計画

1 基本的な考え方

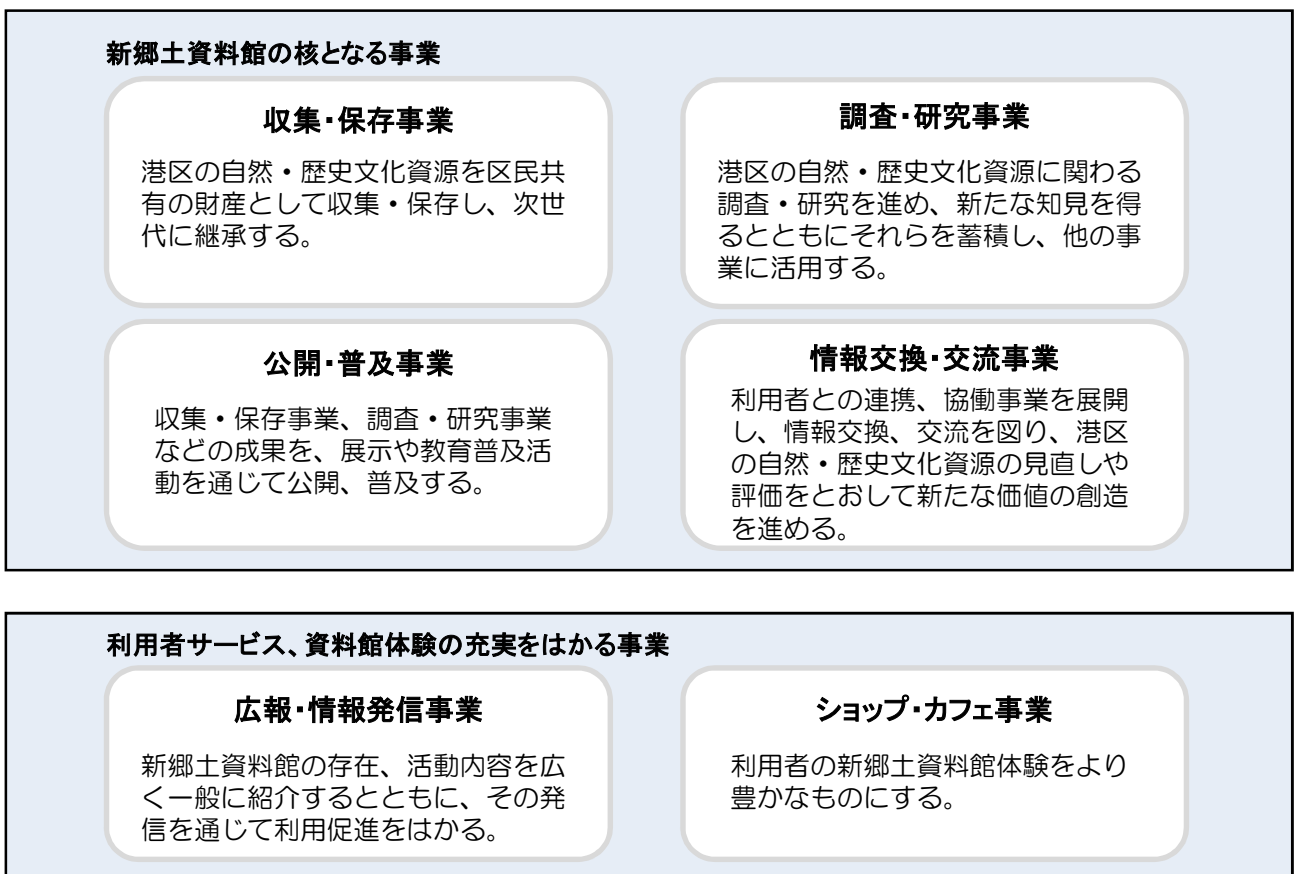
利用者の視点に立った、多彩で柔軟な事業の展開

- 1) 本物との触れ合い、体感・体験、フィールドとの出会いを重視します。
- 2) ユニバーサルデザインの考え方に則り、あらゆる人に開かれた事業を展開します。
- 3) 区の施設はもとより区内、さらには都内・国内外の大学や企業、各種機関などとの連携、ネットワークにより多彩な事業を展開し、港区の自然・歴史文化資源の魅力を発信します。
- 4) 区民や港区に來訪する人々の交流が促進されるような事業展開を行います。とくに福祉事業関連の他施設との複合建物内に設置される特徴を活かし、世代間交流を促します。
- 5) 港区の自然・歴史文化資源とその情報を区民共有の財産として次世代に引き継ぎ、将来にわたって有効に活用できるよう、事業の継続性を重視します。

2 事業の概要

新郷土資料館では、収集・保存事業、調査・研究事業、公開・普及事業、情報交換・交流事業、広報・情報発信事業、ショップ・カフェ事業を展開します。各事業に有機的なつながりを持たせ、魅力ある活動を提供していきます。

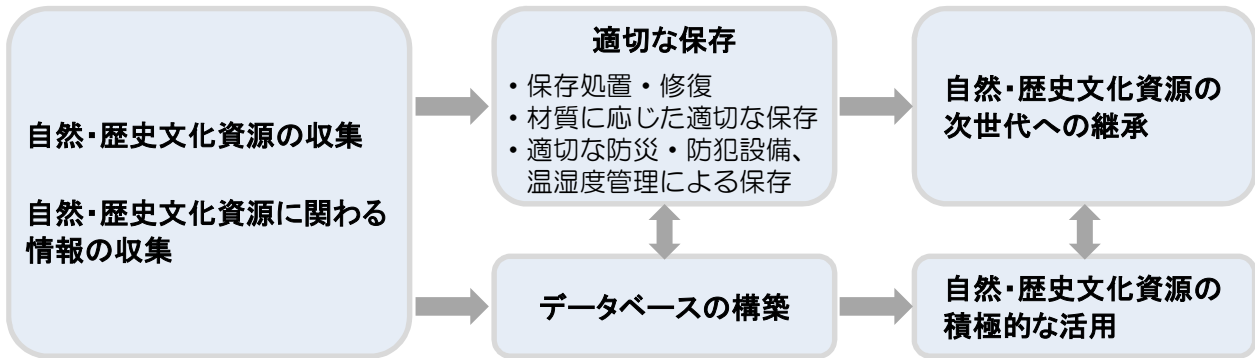
[事業の相関図]



3 事業の展開

(1) 収集・保存事業

自然・歴史文化資源の収集・保存・次世代への継承



収集・保存事業は、港区の自然・歴史文化資源を次世代に確実に継承するため、またそれらを活用して、広く一般に公開し、普及をはかっていくために、新郷土資料館の根幹を成す必要不可欠な事業です。新郷土資料館では収集・保存事業を以下の考え方に沿って実施していきます。

① 収集・保存の対象

新郷土資料館では、区内の自然・歴史文化資源や、国内外に存在する港区に関わる資料や情報を対象として、収集・保存を実施し、その充実に努めます。実物資料の入手が困難な場合や無形文化遺産などについては、複製や写真、映像・音響などの形態によって収集します。

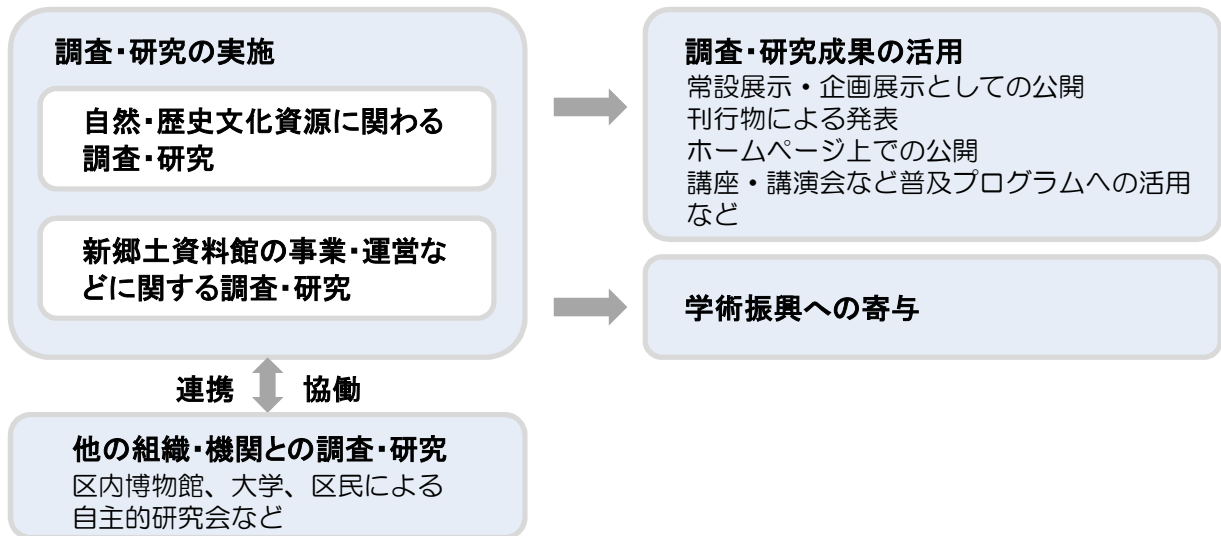
② 収集・保存の方法

発掘、寄贈、寄託、借用、購入、製作などの方法によって、収集を実施します。収集した資料に関する情報（資料名、来歴、状態、概要など）をデータベースとして記録・保存し、さまざまな活用の際に利用できるようにします。また、自然・歴史文化資源の収集と合わせて、これらに関わるさまざまな情報を集め、保管します。

収集した資料は必要に応じて保存処置・修復を行い、各資料の材質に適した保存方法で保存します。資料を次世代に継承するため、適切な防災・防犯設備、温湿度管理のもとで保存し、被災や盗難、劣化などから守ります。

(2) 調査・研究事業

資料と関連情報の質・量の充実をはかり、利用者へ提供



調査・研究事業は、収集・保存事業とともに、港区の自然・歴史文化資源を次世代に継承するため、またそれらを活用して、広く一般に公開し、普及を図っていく上で必要な新郷土資料館の基盤となる事業です。新郷土資料館では調査・研究事業を次のように進めます。

① 調査・研究の種類

〈港区の自然・歴史文化資源に関わる調査・研究〉

新郷土資料館では、区内の自然・歴史文化資源や、国内外に存在する港区に関わる資料やことがらを対象に、継続的な調査・研究を行い、それらの情報の量・質の向上に努めます。

〈新郷土資料館の事業・運営に関わる調査・研究〉

博物館全般に求められる役割や機能は時代に応じて常に変化しています。とくに展示や普及事業、運営に関する研究は近年盛んに行われており、その知見が集積されています。新郷土資料館ではこれらの知見を活かし、常に利用者のニーズに応えられる魅力的な事業展開を行うため、新郷土資料館の事業や運営に関する調査・研究を実施していきます。

② 調査・研究の方法

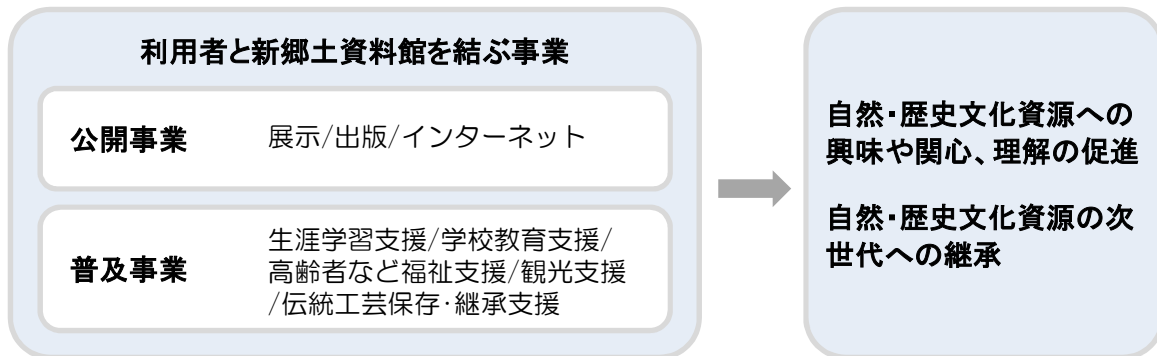
新郷土資料館の学芸員による専門的な研究体制のもと、中長期的な視点、分野横断的・総合的な観点に立って、幅広い調査・研究事業を実施します。区内博物館や大学、区民による自主的研究会など、他の組織・機関との協働による調査・研究の実現に向けて、機能の充実やネットワーク構築を図ります。

③ 調査・研究成果の活用

調査・研究事業によって得られた成果は、常設展示・企画展示として広く一般に公開するほか、研究紀要や調査報告書などの出版物による発表、ホームページ上での公開、講座や講演会などを通じた発信など、さまざまな手段によって公開し、利用者への積極的な還元、学術振興への寄与を図ります。

(3)公開・普及事業

利用者と新郷土資料館を結び、自然・歴史文化資源の理解促進、継承に貢献



公開・普及事業は、学校教育や生涯学習などへの支援や、情報の公開及び普及を行い、利用者と新郷土資料館をつなぐ事業です。さまざまな支援事業、情報公開、普及プログラムを実施し、港区の自然・歴史文化資源への興味や関心、理解を広く促すことによって、それらの資源を次世代に伝える責務を果たしていきます。これらの活動は展示の場を舞台に展開し、新郷土資料館だからこそ可能な本物の体験を利用者に提供していきます。

①公開事業

〈展示による公開〉

新郷土資料館では、区内の自然・歴史文化資源に関わるテーマに基づき、常設展示、企画展示を行い、収集・保存事業、調査・研究事業などの成果を利用者に還元します。（展示の種類や内容については「Ⅲ 展示計画」を参照のこと。）

〈出版による公開〉

調査・研究事業によって得られた成果や展示活動などさまざまな事業展開の成果を、展示図録や資料目録、研究紀要、調査報告書などの出版物を通じて広く一般に公開し、利用者の学習や研究への支援を行います。

〈インターネットによる公開〉

調査・研究事業によって得られた成果や展示活動などさまざまな事業展開の成果は、新郷土資料館のホームページ上でも随時公開します。利用者が必要な時に必要な情報を手軽に得られる、大量のデータを扱える、タイムリーに情報を発信できるといったインターネットの利点を活かし、収蔵資料データベースの公開、新着資料・情報の発信などを行い、利用者のニーズに応えるとともに、その便宜を図ります。

②普及事業

〈生涯学習支援〉

●普及プログラムの実施

新郷土資料館では、区内の自然・歴史文化資源に関わるテーマに基づき、講座や講演会、ワークショップ、シンポジウムなどを実施し、利用者の興味・関心に応えます。プログラムの実施は、新郷土資料館独自で行うほか、区内博物館や大学、区民による自主的研究会などの協力を得ながら、連携・協働事業としても実施します。

●レファレンス、学習相談

新郷土資料館では、港区の自然・歴史文化資源に関わることがらについて専門的な立場から、レファレンスの対応、学習相談を実施します。合わせて図書資料や閲覧スペースをはじめとした設備・機器などを配置し、利用者が自主的に学習や研究活動を行えるようにします。

●生涯学習に関連したアウトリーチ活動

利用者のニーズに応じたアウトリーチ活動を行います。区内の生涯学習施設や区民による自主的研究会などへの学芸員の派遣など、館外でのアウトリーチ事業の展開をめざします。

●ボランティアの養成

港区の自然・歴史文化資源への興味・関心、理解の促進を図るため、また新郷土資料館を積極的に利用してもらうため、ボランティアの養成を行います。資料・情報の収集、展示解説などに参加できるしくみを構築します。

〈学校教育支援〉

●学校教育における新郷土資料館利用の促進

新郷土資料館が、学校教育において有効に活用されるよう、地域学習や歴史学習などへのさまざまな支援を行います。たとえば学習指導要領や単元の内容に連動した展示の設置、新郷土資料館の活用時に用いる解説シートやワークブックなどの開発、新郷土資料館利用の教師用手引書や利用相談の実施、児童・生徒向けの体験性の高い学習プログラムの整備など、学校教育の現場のニーズを把握した上で、これらの支援策を実施します。整備にあたり、教員などと共同企画・開発を行うことも検討します。

●学校教育に関連したアウトリーチ活動

新郷土資料館では、学芸員を派遣する出前授業や、実物資料で構成した教育教材の貸し出しとそれらを使った学習プログラムの実施などを行い、学校教育の現場に出向くアウトリーチ活動を実施します。

●博物館における専門人材の育成支援

学芸員資格講座・課程を持つ大学と連携し、博物館実習やインターンシップの受け入れを行い、博物館における専門的な人材の育成を支援します。

〈建物内の他施設との連携〉

●世代間交流をととした学習の場と機会の創出

新郷土資料館は、在宅緩和ケア支援施設・学童クラブ・子育てひろば・乳幼児一時預かり施設などの他施設との複合建物内に開館します。このことから、他施設利用者である高齢者や乳幼児と保護者などにも新郷土資料館を利用してもらうことが考えられます。例えば高齢者が自らの過去の記憶をたどり、語り、元気になるような空間と環境を整備し、区民から昭和の記憶を利用者が聞き取るプロジェクトや、昔の行事や遊びを再現し体験するプログラムなどを実施します。こうした活動を展開することによって、次世代を担う若者や子どもたちが、人生の先輩である高齢者と触れ合いながら、先人の経験や知識を直接学べるようにするとともに、世代間交流を積極的に進めます。事業の展開にあたり、福祉担当部署との密接な連携を図ります。

●他施設連携のためのしくみづくり

同一建物内に設置が予定されている各施設との連携をスムーズに実施するためには、共同事業や共用スペース利用などの調整をはかる機能が必要です。そのため、各施設の代表者が集まりそれらについて協議を行えるよう、例えば連携調整会議の設置といったしくみづくりを検討します。

〈観光支援〉

新郷土資料館は、港区の顔として、港区を訪れる観光客などが港区の自然、歴史、文化のことについて知りたいとき、最初に足を向ける施設となることをめざし、多様な観光客に港区のことを知っていただくための環境を整備していきます。

- ・ 外国語ボランティアなど外国からの観光客への対応が可能な人的資源の確保
- ・ 観光スポットとしての役割を合わせ持つ事業展開
- ・ 港区への理解を促すガイドブックや港区探訪ルートマップなどの資料の整備
- ・ PC・携帯端末などを活用した、区内関連施設に関する情報の蓄積と検索を可能にするシステムの構築 など

〈伝統工芸保存・継承支援〉

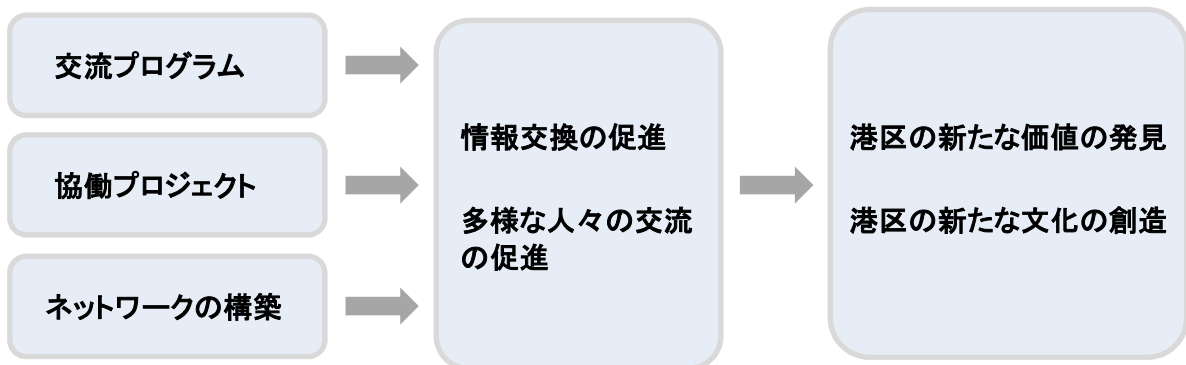
港区には、近世・近代以来の伝統工芸が少なからず存在します。新郷土資料館では、それらを支えてきた人々が保持する技術・技能を、展示を通じて公開し、保存、継承します。また、こうした新郷土資料館の活動を通じて、港区の伝統工芸の新たな展望を開きます。

●ユニバーサルデザインに基づく事業展開

さまざまな障害のある方々はもとより誰もが新郷土資料館を利用できるよう、参加体験型の展示を取り入れる、多様な利用者がともに楽しみながら港区を学ぶことができる普及プログラムなどを実施するなど、事業展開においてもユニバーサルデザインの考え方を盛り込み、障害者、外国人、子ども、高齢者などが共有できる場と機会を創出します。とくに新郷土資料館は在宅緩和ケア支援施設など、福祉事業に関連する他施設との複合建物内に設置されるため、こうした他施設の利用者の来訪を視野に入れて事業を展開します。

(4) 情報交換・交流事業

多様な人材の交流、情報交換が実現する港区の新たな文化と価値の創造



利用者をはじめ、学芸員など資料館職員、ボランティア、サポーター、共同調査・研究者など、さまざまな人々が集い、ともに活動できる場と機会を提供することによって、多様な人材の交流、情報交換、港区の新たな文化や価値の創造に努めます。

① 交流プログラムの実施

区民はもとより区外の人々も対象とした交流プログラムを実施し、人々の交流、情報交換を促します。たとえば、参加者がグループになってそれぞれ担当エリアの絵地図をつくる「港区絵地図づくりワークショップ」などを実施します。多様な利用者の参加と共同作業をプログラムに組み込むことによる、新たな港区の価値の発見、多様な人々の集いが生み出す相乗効果による、新たな文化創造の契機を創出します。

② 協働プロジェクトの実施

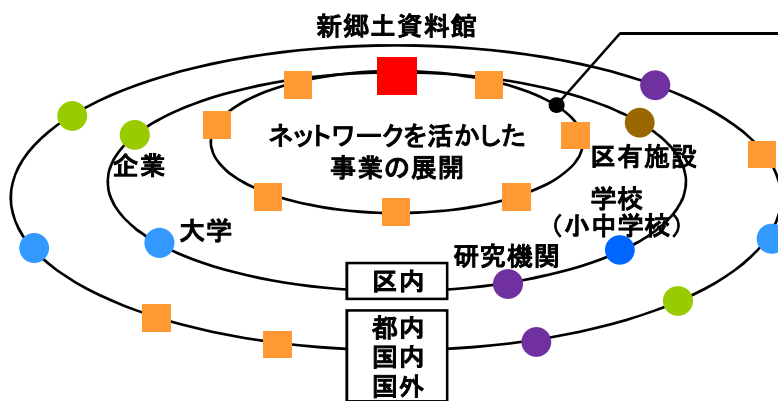
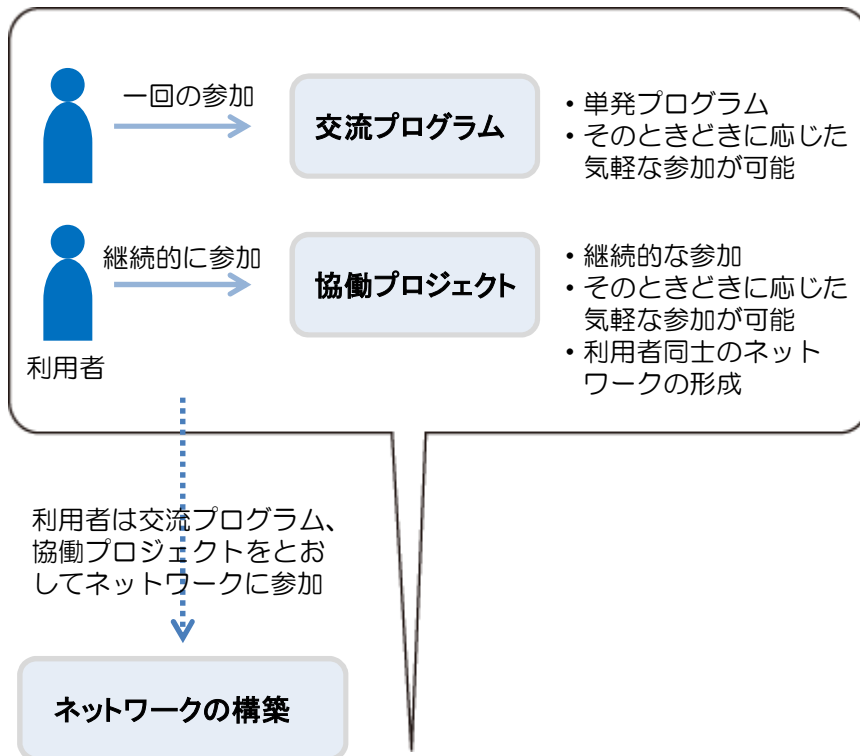
調査・研究事業や公開・普及事業と連携し、さまざまな人材が継続的に参画できる協働プロジェクトを実施します。たとえば、参加者自身が聞き手になって、区民から港区の昭和史に関するエピソードを聴き取るプロジェクトなどを実施します。継続的な取り組みとすることで、人々の交流・情報交換も継続的なものとなるため、新郷土資料館を拠点とした多様な利用者のネットワークの構築が期待できます。

協働プロジェクトを実施する上で、参加者が継続的に自由に使えるスペースの整備が求められます。

③ ネットワークの構築

区内博物館や大学、区民による自主的研究会などとのネットワークを構築し、収集・保存事業、調査・研究事業、公開・普及事業、情報交換・交流事業などの各事業において相互協力、共同実施による活動を展開し、幅広い視点から港区の自然・歴史文化資源の探求・発信を行います。

〈情報交換・交流事業の連関図〉



港区ミュージアムネットワーク(既存)の活用

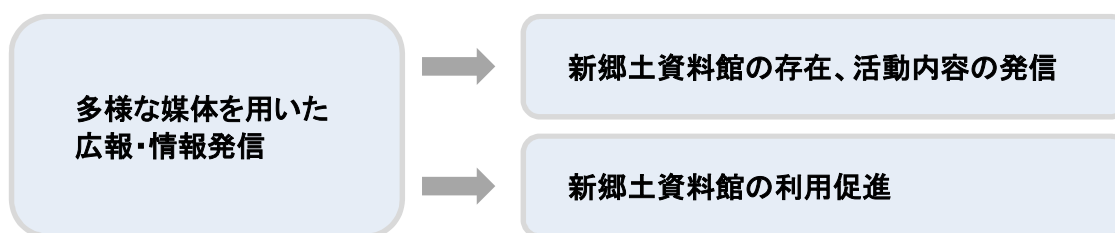
※港区ミュージアムネットワーク
 …区内博物館施設が連携・協力のもと、区内に集積する文化財・文化資源の有効な活用を図りながら各館独自の特色を生かした事業を展開するためのネットワーク。利用者の豊かで充実した暮らしの実現を目的に設立された。平成25年4月1日現在、31館が加盟。

ネットワークによる事業の展開例

- 区内施設などで展開するネットワーク展示
- 区内博物館との共通テーマによる企画展の同時開催
- 大学や研究機関との共同研究・共同調査
- 企業の出展によるミニ企画展コーナーの充実 など

(5) 広報・情報発信事業

多様な媒体を用いた新郷土資料館の発信と利用促進



新郷土資料館の存在やその活動を広く発信するとともに、より多くの利用を促すため、広報・情報発信事業を実施します。あらゆる利用者層に訴えるものとなるようさまざまな媒体を用いるとともに、開館前から開館後の各段階において、目的と時期に応じた的確な広報・情報発信を展開します。

たとえば告知ポスターのデザインを公募により募る、リーフレットなどを利用者と協働で製作するなど、広報・情報発信ツールの作成についても利用者の参画を促し、新郷土資料館を利用者とともにくっついていく姿勢も発信します。

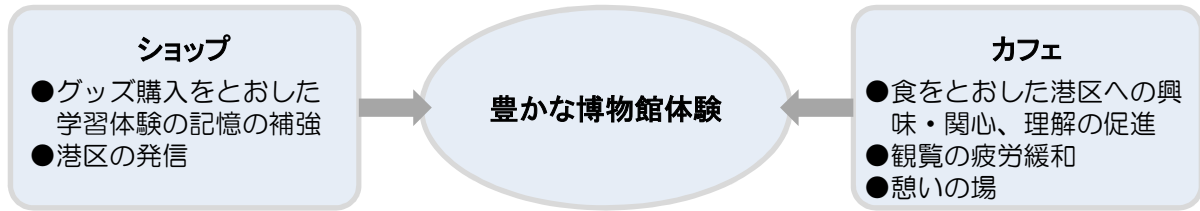
また近年、インターネット関連技術の進展や携帯端末装置の利用拡大に加え、若年層を中心にSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）などの普及が進んでいます。こうした状況をふまえ、新郷土資料館では広報・情報発信事業において、インターネットを積極的に活用していきます。

[広報・情報発信のツール]

- 利用案内リーフレット
- 年間活動スケジュール（リーフレット）
- 資料館だよりの発行
- 告知ポスター掲示
 - ・ 公共交通機関
 - ・ 区内教育機関、博物館、関連施設など
- 広報誌への掲載
- タウン誌などミニコミ誌への掲載
- マスメディアへの働きかけ：プレスリリースなど
- インターネットを活用した広報・情報発信
 - ・ ホームページの開設：利用案内/行事案内/施設概要/収蔵資料情報、最新研究情報などの発信
 - ・ ブログ・ツイッターによる発信

(6) ショップ・カフェ事業

グッズの購入、飲食を通じた豊かな新郷土資料館体験の提供



新郷土資料館での体験がより豊かなものになるよう、ショップ・カフェ事業を展開します。提供するショップのグッズ構成やカフェのメニュー構成は、港区の自然・歴史文化にゆかりのあるものや、収蔵資料をモチーフにしたものとし、学習体験の記憶の補強や持ち帰りが可能となるもので構成します。グッズやメニューにはそれぞれの由来やモチーフとなった資料情報などを付記し、商品の購入や飲食の体験を通じて、港区の自然、歴史・文化への興味や関心がさらに増したり、理解の促進が図られるよう配慮します。

また、カフェ事業については展示観覧などの疲労を癒すための機能を持たせる必要もあるため、居心地のよい空間づくりを行います。

なお、ショップ・カフェ事業を展開するにあたり、周辺店舗などとの競合を避けることにも配慮していきます。

[ショップのグッズ例]

- | | |
|------------------|---|
| ● 展示図録 | ● 芝家具のミニチュア |
| ● 研究紀要 | ● 江戸切絵図（復刻） |
| ● 所蔵品をモチーフにした文房具 | ● 浮世絵（複製） |
| ・ポストカード | ● 区内に所在していた藩邸の紋を用いたピンバッチ（所在地マップと解説ポストカード付） |
| ・一筆箋・メモパッド・付箋など | ● 区内建築のステンドグラスデザインを用いたクリアファイル（旧蜂須賀邸・旧浅野邸など） |
- など

[カフェのメニュー例]

- | | |
|-------------------------|------------------------------|
| ● 縄文クッキー | ● 公衆衛生院の食堂メニュー（カレーなどの軽食） |
| ● 区内店舗の商品を用いたセットメニュー | ● 新橋停車場開設当時の駅弁と汽車土瓶で提供する煎茶など |
| ・老舗菓子店の菓子と茶舗の緑茶のセット | ● 各国のメニュー（大使館のレシピ） |
| ・人気パン屋のパンと紅茶・コーヒーのセットなど | |
| ● 企画展示などと連動した特別メニュー | |

V 施設計画

1 基本的な考え方

新郷土資料館は、次の基本的な考え方に基づき施設計画を進めます。

- ・ 建物の文化財的価値を保存しながら活用するよう、既存の間取りや空間を有効に用いた計画とします。
- ・ バリアフリーやユニバーサルデザインに配慮した計画とします。
- ・ 環境に配慮した計画とします。
- ・ 適切な耐震補強を行い、地震に強い建物とします。

2 諸室の構成

新郷土資料館の諸室は、港区の自然、歴史、文化に関する資料の収集・保存、調査・研究、公開・普及などを行うため、その機能が十分発揮できる構成とします。

区分	諸室名	内容
展示	常設展示室 (ガイダンス展示室)	「港区を知る契機」としての導入展示として、港区の自然、歴史、文化のあらしや港区の5地区の特徴や成り立ち、旧国立保健医療科学院の建物の文化財的価値などを紹介するスペース
	常設展示室 (テーマ展示室)	港区ならではのテーマに基づいたさまざまな形態による展示スペース
	常設展示室 (コミュニケーションルーム)	本物の資料を五感で楽しみながら、港区の自然、歴史、文化を体験・体感し、学芸員と交流するスペース
	企画展示室	港区の自然、歴史、文化に関わるテーマを、期間を定めて、資料館が独自で企画する展示や利用者や協働して展示などを行う独立したスペース
	区民ギャラリー	区民の自主学習グループ、大学や企業などが、調査・研究成果の公開などに利用できるスペース
教育普及	学習室	本物にさわったり、複製を作ってみたりといった体験学習のできる部屋を含め、講座や研修会などを行うスペース ※講堂を利用した講演会の開催などを検討する。
	多目的室	ワークショップや、学校団体などが来館した際の集合や昼食など、さまざまな目的に利用できる柔軟性のあるスペース
	図書閲覧室	新郷土資料館が所蔵している港区の自然、歴史、文化に関わる図書を閲覧できるスペース ※書庫を含む。
	ボランティアルーム	新郷土資料館の運営などを協働で行う際、ボランティアの学習作業、休憩などに利用するスペース

区分	諸室名	内容
調査・研究	歴史研究室	歴史分野に関わる調査・研究を行うためのスペース
	民俗研究室	民俗分野に関わる調査・研究を行うためのスペース
	建築史研究室	建築史分野に関わる調査・研究を行うためのスペース
	考古研究室	考古分野に関わる調査・研究を行うためのスペース
	自然史研究室	自然史分野に関わる調査・研究を行うためのスペース
	ミーティングルーム	学芸員が打ち合わせなどを行うスペース
	研究用書庫	学芸員が調査・研究を行うための図書資料を保管するスペース
	資料整理室	収集した資料などを分類、整理し、資料をデータベース化するためのスペース
	作業室	収集した資料などの調査・研究を行うために、資料の補修や工作作業などを行うスペース
	多目的研究室	外部研究員などによる一時的な研究などに利用できるスペース
収集・保存	一般収蔵庫	新郷土資料館が保存する資料などを収蔵するスペース ※一部、考古資料や展示に供することが困難な大型建具や民具などが見学できるスペースとする。
	特別収蔵庫	とくに温湿度管理に配慮を必要とする資料を保管するため、24時間常時管理を行うスペース ※部屋の中は、吸脱湿性能を考慮した材料で仕上げ、庫内の温湿度環境を保持するため、前室を設ける。
	デジタルメディア収蔵庫	フィルムやデジタルデータなどのデジタルメディアを保管するためのスペース
	トラックヤード	資料などの搬出入をするための、トラックなどの駐車スペース ※資料などの保存環境の変化を避けるため、外気を遮断できる空間とする。
	荷解室	搬出入をした資料を荷解きするためのスペース
	一時保管庫	荷降ろし後の資料を収蔵庫や展示室などへ搬送するため、一時的に保管し、環境に慣れさせるためのスペース
	資料処理室	館蔵資料として収蔵するための物理的・理化学的処理を行うスペース ※大型冷凍庫・冷蔵庫を設置し、著しい劣化など特殊な状態にある資料を保管する。また、凍結乾燥機などを整備し、水分を多量に含む資料を展示などで活用できるよう処理するスペースとする。
	写真撮影室	展示や収蔵資料の写真撮影を行うスペース ※暗室は不要。

区分	諸室名	内容
その他	事務室	資料館を運営・管理するための事務スペース
	応接室	来客などの応接スペース
	会議室	資料館内部や事業者などと打ち合わせをするためのスペース
	印刷室	チラシや講座資料などを印刷するためのスペース ※大判印刷機もあわせて設置。
	休憩室	資料館職員の休憩スペース
	乳幼児一時預かり室	講座など開催の際、乳幼児を一時的に預かるためのスペース ※講座などが開催されていない時は、授乳室として利用。
	スタッフ室	建物管理員、清掃員などのためのスペース
	受付	資料館の総合案内や入館受付のためのスペース
	警備室	防犯カメラモニターの監視や館内警備員の控室など資料館警備のためのスペース
	サーバー室	デジタル資料やインターネット配信用サーバーを保管するため、24時間空調管理を行うスペース
	機械室	展示室をはじめとした、建物管理のための機械や自家発電設備などを設置するスペース
	消火ガスボンベ室	収蔵・展示資料など消火用ガスにより消火するためのボンベ設置用スペース
	倉庫	事務用品や展示用品、資料保存用品などを保管しておくスペース
	(仮称) 学校歴史資料室	統合された学校の歴史を伝える資料を見学しながら、同窓生や利用者が交流を図るためのスペース
	ミュージアムショップ	資料館が発行する刊行物やグッズなどを販売するスペース
カフェ	展示観覧などの疲労を癒すための機能を持たせ、休憩のできるスペース	
共用部	廊下、階段、E Vなど	

参考資料

1 港区立新郷土資料館開設準備委員会設置要綱

平成24年2月16日
23港教文第737号

(設置)

第1条 旧国立保健医療科学院に設置予定の新郷土資料館の開設準備を適切に実施するため、新郷土資料館開設準備委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(所掌事項)

第2条 委員会は、次に掲げる事項を検討し、教育長に報告する。

- (1) 新郷土資料館の施設、事業及び運営管理の基本計画に関すること。
- (2) 新郷土資料館の施設、事業及び運営管理の基本設計及び実施設計に関すること。
- (3) その他委員会が必要と認める事項

(組織)

第3条 委員会は、次に掲げる者で教育長が委嘱し、又は任命する委員14人以内をもって組織する。

- (1) 学識経験者 7人以内
- (2) 区民 3人以内
- (3) 区職員 4人以内

(委員長及び副委員長)

第4条 委員会に委員長及び副委員長を置く。

- 2 委員長は、学識経験者の委員のうちから互選により選出する。
- 3 委員長は、会務を統括する。
- 4 副委員長は、委員のうちから委員長が指名する。
- 5 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときは、その職務を代理する。

(運営)

第5条 委員会は、委員長が招集する。

- 2 委員会は、委員の過半数の出席がなければ会議を開くことができない。
- 3 委員会の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、委員長が決するところによる。
- 4 委員会の会議は、原則として公開とする。ただし、出席委員の過半数の同意を得て非公開とすることができる。

(意見の聴取)

第6条 委員会は、必要と認めるときは、委員以外の者に対して委員会への出席を求め、その意見を聴くことができる。

(守秘義務)

第7条 委員は、委員会の審議において知り得た秘密を漏らしてはならない。その職を退いた後も、また、同様とする。

(庶務)

第8条 委員会の庶務は、教育委員会事務局図書・文化財課において処理する。

(委任)

第9条 この要綱に定めるもののほか、必要な事項は、教育長が別に定める。

付 則

この要綱は、平成24年4月1日から施行する。

2 新郷土資料館開設準備委員会委員名簿

区分	氏名	所属
近現代史学	大門 正克	横浜国立大学 経済学部教授
近世史学	太田 尚宏	国文学研究資料館 准教授
保存科学	北野 信彦	東京文化財研究所 保存修復科学センター 伝統技術研究室 室長
博物館学	久留島 浩 (委員長)	国立歴史民俗博物館 研究部 教授
海洋生態学	河野 博	東京海洋大学 海洋科学部 教授
考古学	西本 豊弘	国立歴史民俗博物館 名誉教授
民俗学	安室 知	神奈川大学 経済学部教授
区民	長田 智之	公募区民
区民	斎藤 三枝子	公募区民
区民	齋藤 理恵	公募区民
職員	小柳津 明 (第1回～第3回 副委員長)	教育委員会事務局次長
職員	安田 雅俊 (第4回～第7回 副委員長)	教育委員会事務局次長
職員	山本 睦美	教育政策担当課長
職員	沼倉 賢司 (第1回～第6回)	図書・文化財課長
職員	前田 憲一 (第7回)	図書・文化財課長
職員	平田 英司	指導室長

3 新郷土資料館開設準備委員会開催経過

日付	開催内容
平成24年 5月25日	第1回新郷土資料館開設準備委員会 ・現郷土資料館、新郷土資料館開設場所である旧国立保健医療科学院の視察 ・新郷土資料館整備に係る経緯の説明 ・今後の進め方の検討
平成24年 7月11日	第2回新郷土資料館開設準備委員会 ・設置の目的、理念等の検討
平成24年 9月22日	第3回新郷土資料館開設準備委員会 ・計画策定の背景、基本的な考え方等の検討
平成24年 10月29日	第4回新郷土資料館開設準備委員会 ・展示の基本的考え方及び構成等の検討
平成25年 1月18日	第5回新郷土資料館開設準備委員会 ・展示の基本的な考え方及び構成、事業、施設計画等の検討
平成25年 3月 5日	第6回新郷土資料館開設準備委員会 ・新郷土資料館展示等総合計画（素案）の検討
平成25年 6月12日	第7回新郷土資料館開設準備委員会 ・新郷土資料館展示等総合計画（案）の検討

4 「港区立新郷土資料館展示等総合計画(素案)」に関する区民意見について

- 1 実施時期及び募集方法
 電子メール、ファックス、郵送、持参 実施時期：平成25年5月1日（水）～5月31日（金）
 住民説明会 実施時期：平成25年5月28日（火）、6月2日（日）
- 2 意見募集の結果
 区民意見募集 受付4件（内訳：電子メール1名、郵送2名、持参1名）：ご意見等10件
 住民説明会 参加者延べ53名：ご意見等2件

主な意見、要望等	区教育委員会の考え方	展示等総合計画書への反映
地学分野への取り組みを充実してほしい。	常設展示の中のガイダンス展示を中心に、地形や地質の展示を計画します。 計画16頁に展示概要・主な展示資料を明記し、反映しました。	16頁
港区は、魅力的な地形であり、多くの坂があることや江戸前の海である東京湾の地形変化も興味深いテーマなので、地質学、地形学の展示強化をしてほしい。		
公開講座には、地学関連講座も導入してほしい。	講座などの開設後の事業については、ご意見を踏まえ、今後検討していきます。	—
海岸線や運河等を観察する水上ツアー等の企画をしてほしい。		
動植物の標本及び自然誌関連の資料情報の収集・管理の一元化をしてほしい。	計画11頁に記載のとおり、港区に関わる自然・歴史文化資源 ⁽¹⁾ を中心に収集し、その充実を図ります。	—
港区と世界の生物多様性を守り、未来への提案がある展示をしてほしい。	港区の自然、歴史、文化に関する展示を展開していくことを基本的な考え方としており、計画16頁、ガイダンス展示「港区の自然」に展示概要・主な展示資料として明記しました。	16頁
展示や教育普及の内容に、生物多様性を通じた港区と世界とのかかわりを持つことを盛り込んでほしい。		
港区生物多様性センターを設置し、郷土資料館と一体的な組織編成を行ってほしい。	現在、環境担当部局において、区民・事業者の参加を得ながら、港区生物多様性地域戦略を平成25年度末策定に向けて、進めているところです。	—
生物多様性の基盤の資料や情報のシンクタンクとしての役割を郷土資料館にしてほしい。	現段階で生物多様性センターを設置することや郷土資料館が生物多様性に関するシンクタンクとなることなどの考え方は確立されていませんが、事業連携をしていくなど関係課等と今後検討していきます。	
学校等の貴重な資料は元PTA会長会が運営する「保存会」で所有しており、「保存会」の許可無く持ち出すことはできないが、展示のための貸し出すことは可能である。	学校歴史資料の展示については、各校の保存会や同窓会等の関係機関、関係者にご意見を伺いながら、計画することとしております。	—
郷土資料館は、できたころは、大勢の来館があるかもしれないが、こんなに必要なのか。	現在の郷土資料館は狭あいであり、区の貴重な文化財等の資料を分散して保管しているため、保管のみならず、活用にも支障をきたしています。新郷土資料館では、資料を集約できる収蔵・展示スペースを確保することで、区民の方々などへの資料の公開を容易にし、区の貴重な文化財等の資料を適宜入れ替えながら展示するなど、積極的な活用を図る計画です。また、観光資源としての役割、区内の学校の教育の場としての活用も計画しています。	—
郷土資料館について、区民が使えるようなスペースはないのか。ないのであれば、区民が使えるようなスペースを作ってほしい。	区民の方などが利用できる区民ギャラリーやカフェの整備を検討しています。	15頁 33頁

註(1) 本計画では、資料・情報を積極的に活用する視点から資源としている。